富の平遺跡
とみ　たいら　い　せき

土地改良総合整備事業に伴う
埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書

―本　文　編―

1996年3月
長野県飯田市教育委員会

富の平遺跡

とみ　たいら　い　せき

土地改良総合整備事業に伴う
埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書

―本　文　編―

1996年3月

長野県飯田市教育委員会

序

飯田市は、自然的条件に恵まれ、また、古来交通の要衝に位置しており、埋蔵文化財をはじめ多くの文化財を遺しています。これらは私たちの地域社会や文化を形作ってきたさまざまな証しであり、できるかぎり現状の姿のままで後世に残し伝えることが私たちの責務でありましょう。けれども、同時に、私たちはより良い社会や生活を求めていく権利を持っています。ですから、日常生活のさまざまな場面で、文化財の保護と開発という相い容れぬ事態に直面することが多くなっています。こうした場合、発掘調査をして記録としてとどめることも止むを得ないものといえましょう。

平成3年度から、飯田市では伊賀良大瀬木地籍で土地改良総合整備事業を実施することになりました。圃場整備を行ない、農業生産の高度化・機械化を図り、これによって生産性の向上を目指すもので、昨今の農業を取り巻く情勢を考慮するとき、地区の農業振興のため是非とも必要な事業といえましょう。けれども、事業予定地内には埋蔵文化財包蔵地三尋石遺跡・増泉寺付近遺跡・富士塚遺跡・富の平遺跡がかかり、圃場整備事業によって壊されてしまうことになりました。そこで、次善の策ではありますが、事業実施に先立って緊急発掘調査を実施して、記録保存を図ることになりました。

調査結果は本書のとおりでありまして、調査で得られましたさまざまな知見はこれからの地域史研究の上で貴重なものばかりであると確信いたします。特に、縄文時代中期のおびただしい遺構・遺物が調査されました増泉寺付近遺跡では、ほぼ一つのムラを掘り上げたわけで、ムラの姿がどう変わっていったか、明らかになったそうですし、また、各遺跡で貴重な資料が提供され、他地域との交流の様子が窺えると聞き及んでいます。

最後になりましたが、現地および遺構・遺物についてご指導をいただきました諸機関・個人各位、調査にあたり多大なご理解とご協力をいただいた地権者ならびに隣接地の方々、現地作業および整理作業に従事された作業員の方々ほか関係各位に、深甚なる謝意を申し述べつつ刊行の辞とする次第であります。

平成8年3月

飯田市教育委員会

教育長　小　林　恭之助

例　言

1．本書は土地改良総合整備事業（大瀬木東地区）に伴い実施された、飯田市伊賀良所在の埋蔵文化財包蔵地富の平遺跡の緊急発掘調査報告書である。

2．調査は、飯田市農林部からの委託を受け、飯田市教育委員会が実施した。なお、事業のうち農家負担分については、重要遺跡の記録保存を図るため、市内遺跡緊急調査事業として国・県の補助を受けて飯田市教育委員会が直営実施した。

3．調査は、平成４～５年度に試掘及び発掘調査を、６～７年度整理作業および報告書作成作業を行なった。

4．発掘調査位置は、国土基本図の区画、ＬＣ－83に位置し、（社団法人日本測量協会　1969「国土基本図図式　同適用規定」参照）、調査区は、飯田市埋蔵文化財基準メッシュ図に基ずいて設定した。

5．発掘作業・整理作業にあたり、遺跡略号としてＯＴＴを一貫して用いた。

6．現地での調査実施にあたり、調査区設定・航空測量・航空写真撮影を株式会社ジャステックに、遺跡の自然科学分析を（株）パリノ＝サーヴェイに委託実施した。

7．本報告書の記載順は住居址を優先した。遺構図は本文と併せ挿図とし、遺物および写真図版は本文末に一括した。

8．本書は吉川　豊・馬場保之・吉川金利が執筆し、各文・表末に執筆者を記してある。本文の一部について小林正春が加筆・訂正を行なった。

9．本書に掲載された図面類の整理は宮内真理子が、遺物実測を新井ゆり子・池田幸子・坂井勇雄・古根素子・松島直美・吉川悦子があたった。また、遺物実測の一部および写真撮影は株式会社ジャステックに委託実施した。なお、作業実施について、吉川　豊・吉川（金）・渋谷恵美子が補佐した。

10. 本書の編集は、飯田市教育委員会の責任のもとに、吉川（金）が行なった。

11. 各遺構はそれぞれ１号から番号を付しているが、３号住居址及び土坑５・７は欠番となっている。

12. 本書に掲載した遺構図の中に記した数字は、検出面からそれぞれの穴の深さ（単位cm）を表している。

13. 本書に掲載した石器実測図の表現は『恒川遺跡群』（飯田市教育委員会　1986）に準拠し、それ以外の表現として、節理面を斜線で表現した。

14. 本書に関連する出土遺物および記録された図面・写真類は飯田市教育委員会が管理し、飯田市考古資料館で保管している。

本 文 編 目 次

序
例　　言
本文編目次
Ⅰ　経　過
1．調査に至るまでの経過 …… 1
2．調査の経過 …… 1
3．調査組織 …… 4
Ⅱ　遺跡の環境
1．自然環境 …… 7
2．歴史環境 …… 7
Ⅲ　調査結果
1．試掘結果 …… 15
2．竪穴住居址 …… 16
（1）縄文時代 …… 16
①4号住居址 …… 16
②6号住居址 …… 17
（2）弥生時代～古墳時代 …… 18
①1号住居址 …… 18
②5号住居址 …… 19
（3）古墳時代 …… 20
①2号住居址 …… 20
3．掘立柱建物址 …… 21
掘立柱建物址1～9 …… 21
4．土坑 …… 28
土坑1～99 …… 28
5．溝址 …… 49
溝址1～6 …… 49
6．ピット …… 49
Ⅳ　まとめ
1．縄文時代 …… 51
（1）縄文時代の遺物について …… 51
（2）縄文時代の集落について …… 51
2．古墳時代前期 …… 52
（1）富の平遺跡の集落について …… 52
（2）古墳時代の遺物について …… 53
3．中世以降 …… 54
（1）建物址について …… 54
引用参考文献 …… 58
付編 …… 61
飯田市富の平遺跡自然科学分析報告
（パリノ・サーヴェイ株式会社）
報告書抄録 …… 66

Ⅰ　経　　過

1．調査に至るまでの経過

飯田市長　田中秀典より飯田市伊賀良大瀬木地区における農村基盤総合整備事業の計画が提示され、平成２年８月23日、事業にかかる埋蔵文化財包蔵地について、事業主体である飯田市農林部・長野県教育委員会・飯田市教育委員会の三者が保護協議を実施した。

平成３年度になって事業計画が具体化されたのを受けて、事業地内の平成３年度施工予定地に三尋石遺跡・増泉寺付近遺跡・富士塚遺跡の３遺跡がかかるため、平成３年５月29日と９月９日の両度保護協議を実施し、とりあえず各遺跡について試掘調査を実施し、その結果に基づいて改めて協議することとなった。（馬場保之）

2．調査の経過

（1）平成３年度

平成３年度の事業実施予定地については、９月21日、試掘調査に着手した。まず、三尋石遺跡について重機により５本の試掘トレンチを掘削し、引き続き、増泉寺付近遺跡・富士塚遺跡についてそれぞれ３本・４本の試掘トレンチをあけた。調査の結果、三尋石遺跡の一画で縄文時代中期から後期にかけての多数の遺物が出土し、該期の土坑等が確認された。また、増泉寺付近遺跡では全面に縄文時代中期の遺構・遺物分布が認められた。富士塚遺跡については縄文時代中期の遺物が少量出土したが、広範囲に重機による造成が及んでおり、遺構・遺物の遺存状態は不良であった。

そこで、平成３年10月２日、飯田市農林部・長野県教育委員会・飯田市教育委員会の三者が改めて現地で保護協議を実施した。その結果、三尋石遺跡の一部と増泉寺付近遺跡については事業実施に先立ち次善の策として記録保存を図ることとなり、飯田市教育委員会に発掘調査を委託することとなった。

なお、農村基盤総合整備事業は国・県の補助を受けて実施されるものであり、発掘調査費用のうち農家負担分については文化財を保護する立場の教育委員会が対応すべきとして、国・県の補助を受けて飯田市教育委員会が実施する直営事業市内遺跡緊急調査で行なうこととなった。

諸協議に基づいて、10月21日本調査に着手した。まず、三尋石遺跡に、続いて増泉寺付近遺跡に重機を入れて表土剥ぎを行なった。10月23日、三尋石遺跡で、翌24日から増泉寺付近遺跡で作業員による作業を開始した。重機による荒れ土を除去し、竪穴住居址続いてその他の遺構を検出

し、掘り下げて精査した。それらについて写真撮影・測量調査を実施し、12月17日一旦増泉寺付近遺跡の現地調査を中止した。12月20日、中断していた三尋石遺跡の調査を再開した。各グリッド毎遺物包含層を掘り下げ、続いて、竪穴住居址・土坑等を検出・掘り下げ作業を行なった。写真撮影・測量調査の後、平成4年1月16日三尋石遺跡の現地作業を終了した。

中断していた増泉寺付近遺跡の調査は4年2月8日から重機による排土の移動を待って、未調査部分の調査に着手した。重機を入れて表土剥ぎを行なった後、2月13日から作業員による精査を行なった。検出された遺構等について写真撮影・測量調査を実施し、2月25日いっさいの現地調査を終了した。

引き続き、飯田市考古資料館において、図面および撮影写真等についての基本的な整理作業を行なった。

(2) 平成4年度

平成4年度事業実施予定地は、三尋石遺跡（Ⅱ）・富士塚遺跡の2遺跡がかかることとなった。そこで、三尋石遺跡（Ⅱ）に4月13日、重機を入れて試掘調査に着手し、4月15日、作業員により遺構の確認作業を行なった。その結果、縄文時代中期の竪穴住居址が確認され、本発掘調査の実施が必要と判断された。また、富士塚遺跡については、5月26日重機を入れて試掘調査を実施した。その結果、縄文時代後期の土坑と遺物、それに多数の小柱穴等が確認され、本調査実施が必要となった。さらに、12月になって事業予定地の変更が行なわれ、富の平遺跡の一画がかかることになり、急遽試掘調査を実施した。その結果、縄文時代〜中世の各時期の、竪穴住居址・建物址・土坑・溝址等が確認された。

諸協議に基づいて、10月8日、富士塚遺跡の本調査に着手した。重機を入れて表土剥ぎを行ない、10月9日、作業員を入れて作業を開始した。重機の荒れ土を除去し、土坑・集石・小柱穴その他の遺構を検出し、順次掘り下げて精査した。そして、全体および個別の写真撮影、集石の断ち割り調査等を行ない、10月27日、現地での作業を終了した。また、航空写真撮影・航空測量調査を（株）ジャステックに委託実施した。

また、三尋石遺跡（Ⅱ）については、11月6日、本調査に着手した。重機を入れて表土剥ぎを行ない、11月11日、作業員を入れて作業を開始した。重機荒れ土を除去し、竪穴住居址続いてその他の遺構を検出し、掘り下げて精査した。全体および各遺構個別の写真撮影を行ない、航空写真撮影・航空測量調査を（株）ジャステックに委託した。最後に炉址等の断ち割り調査や補充の測量調査をして、12月16日現地での作業を終了した。

平成5年1月25日、富の平遺跡の本調査に着手した。重機を入れて表土剥ぎを行ない、2月1日、作業員を入れた。重機荒れ土の除去に続き、遺構検出を行ない、竪穴住居址その他の検出遺構について掘り下げて精査した。それぞれについて写真撮影等を行ない、航空写真撮影・航空測量調査を（株）ジャステックに委託した。最後に炉址等の断ち割り調査および測量の補充調査を

して、3月25日現地での作業を終了した。

なお、平成5年度事業予定地として、富士塚遺跡（Ⅱ）・富の平遺跡が該当することから、平成5年3月10日から18日にかけて両遺跡の試掘調査を実施し、それぞれについて本調査が必要であると判断された。

飯田市考古資料館においては、平成3年度調査を実施した三尋石遺跡・増泉寺付近遺跡についての、出土遺物・図面類の整理作業を実施した。作業内容は、出土遺物の水洗・注記および接合・復元作業の一部を行なった。図面類については、遺構全体図作成・第二原図作成・トレース等の作業を行なった。また、本年度調査を実施した三尋石遺跡（Ⅱ）・富士塚遺跡については、現地で記録された図面・写真等について基本的な整理作業を行なった。

(3) 平成5年度

富の平遺跡は、平成4年度中に実施した試掘調査の結果を受けて、重機で表土剥ぎ作業を行ない、平成5年5月6日より作業員を入れて本発掘調査を開始した。まず、重機による荒れ土を除去した後、ジョレンで遺構を検出した。竪穴住居址・掘立柱建物址・土坑等が確認され、これらについて順次掘り下げて精査を行なうとともに、全体および個別の写真撮影、炉址の断ち割り調査等を実施し、6月8日までに現地での作業を終了した。その間、5月31日と6月8日に（株）ジャステックによる委託航空測量・航空写真撮影を、また、6月8日には古環境復元のための自然科学的な分析調査を（株）パリノ＝サーヴェイに委託実施するため、試料のサンプリングを行なった。

富士塚遺跡（Ⅱ）は、8月17日より8月26日まで重機で表土剥ぎ作業を行ない、8月30日、現地での発掘調査を開始した。検出された遺構は中世以降の小土坑で、出土遺物は陶器片が僅かである。調査区南側は湿地帯、西側は切り土されており、全体的に耕作による攪乱が多い。これらを確認した後、（株）ジャステックにより委託航空測量・航空写真撮影を行ない、9月2日に現地での作業を終了した。

飯田市考古資料館においては、昨年に引き続き、三尋石遺跡・増泉寺付近遺跡・三尋石遺跡（Ⅱ）・富士塚遺跡についての、出土遺物・図面類の整理作業を実施した。作業内容は、出土遺物の水洗・注記および接合・復元・実測作業の一部を行なった。図面類については、遺構全体図作成・第二原図作成・トレース等の作業を行なった。また、本年度調査を実施した富士塚遺跡（Ⅱ）・富の平遺跡については、現地で記録された図面・写真等について基本的な整理作業を行なった。

(4) 平成6年度

平成6年度は、3～5年度の発掘調査分について、5年度に引き続いて飯田市考古資料館および飯田市考古博物館において整理作業を実施した。富士塚遺跡・富の平遺跡については、遺物の水洗・注記・接合・復元作業および遺物実測の一部等を行なった。三尋石遺跡・増泉寺付近遺跡・

三尋石遺跡（Ⅱ）については遺物実測作業、土器の拓本・断面実測等の作業を中心に実施した。また、各遺跡について、遺構図の第二原図作成・トレース・貼り込み、遺物実測図・土器断面図のトレース等の整理作業を実施した。

（5）平成７年度

６年度に引き続き、飯田市考古資料館において、残りの遺物実測・トレース作業、土器の拓本・断面実測、遺構図のトレース・貼り込み・版組、遺物写真撮影、原稿執筆、編集等の作業を実施し、本発掘調査報告書の作成を行なった。（馬場保之）

３．調査組織

調査主体者　飯田市教育委員会　教育長　福島　稔　（～平成３年12月）
小林恭之助　（平成３年12月～）

調査担当者　小林正春・馬場保之

調査員　佐々木嘉和・山下誠一・佐合英治・吉川　豊・渋谷恵美子・吉川金利・下平博行
伊藤尚志・福澤好晃

作業員　新井幸子・新井幸子・新井ゆり子・池田幸子・市瀬長年・井坪　節・伊藤さだみ
伊藤せつ子・伊藤博紀・井上恵資・今村春一・今村治子・居山ミキ子・太田沢男
大野　深・大原久和・岡島定治・岡島　亘・岡田直人・岡田紀子・奥村栄子・
小沢信治・小沢はな・加藤時友・加藤　富・金井照子・金井三佳子・金子正子・
金子裕子・唐沢古千代・唐沢さかえ・唐沢やち子・川上一子・川上みはる・
川上　玲・北川　彰・北沢直子・北原久美子・北原森作・北村重実・木下喜代恵
木下賢一・木下貞子・木下早苗・木下　傳・木下経子・木下当一・木下義男・
木下良子・木下義郎・木下玲子・桐生八千代・櫛原亜紀子・櫛原勝子・
久保田まさえ・久保田美津子・久保田やよい・熊谷義章・小池金太郎・
小池千津子・小池侑子・香山貴章・小島孝修・小平不二子・小平峯子・小平隆二
小西広司・小林千枝・小林世志・斉藤千里・斉藤徳子・坂井勇雄・榊原政夫・
坂下やすゑ・佐々木文茂・佐々木真奈美・佐々木美千枝・佐々木光江・
佐藤喜代一・佐藤知代子・塩沢澄子・塩沢　節・清水三郎・清水恒子・下井正俊
下井田衛・代田和登・菅沼庄三・菅沼和加子・鋤柄廣一・鈴木尊子・関口みさ子
関島真由美・瀬古郁保・高橋収二郎・滝上信江・滝上正一・田口久美子・
竹本常子・田中　薫・田中恵子・田中百子・塚原次郎・遠山駒吉・中島佳寿子・
中島　正・中島真弓・中平隆雄・仲田昭平・鳴海紀彦・西尾茂人・西尾俊貴・

西山あい子・丹羽啓子・丹羽由美・萩原弘枝・畠山英夫・服部光男・馬場和子・林　朝子・林勢紀子・林　年雄・原　克美・原　祐三・原田四郎八・肥後みち・樋本宣子・平栗陽子・広井　保・福沢育子・福沢　勲・福沢五男・福沢幸子・福沢トシ子・福沢昌子・古井純男・古根素子・古林登志子・細田七郎・牧内郁代牧内　修・牧内喜久子・牧内とし子・牧内八代・正木実重子・増田香代子・松沢美和子・松沢　豊・松下成司・松下直市・松下真幸・松下光利・松島　保・松島直美・松島なみ・松村かつみ・松本恭子・松本幸子・三浦厚子・水落佳代子溝上清見・三石久雄・南井規子・宮内真理子・宮下恵美子・宮下貞一・森　　章森津多恵・森　信子・森藤美知子・矢澤博志・柳沢謙二・山田康夫・吉川悦子・吉川和夫・吉川紀美子・吉川小夜子・吉川正実・吉沢佐紀子・吉沢二郎・吉沢まつ美・芳山　幹・依田時子・渡部　誠

指導　　長野県教育委員会

事務局

飯田市教育委員会社会教育課

安野　節　（社会教育課長、～平成５年度）
横田　穆　（社会教育課長、平成６年度～）
中井洋一　（社会教育課　文化係長、～平成３年度）
原田吉樹　（　〃　文化係長、～平成５年度）
小林正春　（　〃　文化係～平成５年度）
　　（　〃　文化係長、平成６年度～）
吉川　豊　（　〃　文化係）
山下誠一　（　〃　〃　、平成６年度～）
馬場保之　（　〃　〃　）
渋谷恵美子（　〃　〃　、～平成５年度）
吉川金利　（　〃　〃　、平成５年度～）
下平博行　（　〃　〃　、平成５年度～）
伊藤尚志　（　〃　〃　、平成６年度～）
福澤好晃　（　〃　〃　、平成４年度～）
岡田茂子　（　〃　社会教育係、平成５年度～）
篠田　恵　（　〃　〃　、～平成４年度）

A．三尋石遺跡　B．増泉寺付近遺跡　C．富士塚遺跡　D．富の平遺跡
1．立野遺跡　2．山口遺跡　3．与志原遺跡　4．上の平東部遺跡
5．寺山遺跡　6．六反田遺跡　7．大東遺跡　8．酒屋前遺跡
9．滝沢井尻遺跡　10．小垣外（辻垣外）遺跡　11．三壺淵遺跡　12．飯田垣外遺跡
13．火振原遺跡　14．梅ケ久保遺跡　15．細田北遺跡　16．河原林遺跡
17．直刀原遺跡　18．大原遺跡　19．鳥屋平遺跡　20．中村中平遺跡

挿図１　調査遺跡及び周辺遺跡位置図

Ⅱ　遺跡の環境

1．自然環境

伊賀良地区は飯田市西部にあり、飯田市街地の南西に位置する。北側は鼎地区、東側は松尾・竜丘地区、南側は山本・三穂地区に接する。

飯田市は南アルプスと中央アルプスにはさまれた伊那谷の南端にあたり、両山脈の間を天竜川が南流する。天竜川に平行する河岸段丘地形を特徴とするが、両山脈の形成に関わる断層地塊運動に伴ない盆地・大きな段丘崖が形成された結果であり、複雑な段丘地形を呈している。伊賀良地区の場合、西側と東側で大きく地形が変化している。西半は中央アルプスの前山である笠松山（1271ｍ）・高鳥屋山（1397ｍ）東山麓にあたり、飯田松川・茂都計川をはじめ、笠松山・高鳥屋山から流れ出す入野沢川・南沢川・滝沢川・新川等の河川によって形成された広大な扇状地が広がる。扇端はおおむね北方地籍では新井付近、大瀬木で伊賀良小学校付近、中村の長清寺付近であり、これより西側は傾斜の比較的急な斜面となっている。扇端の一部は前述の線を大きく越えて東側に伸びており、下殿岡地籍まで達するものもある。扇端付近では通例の如く湧水が豊かであるが、この扇状地が小河川により幾重にも複合して形成されているため、比較的湧水に恵まれ、今日でも横井戸を利用している住宅がみられる。扇状地の形成に大きな役割を果たした小河川は現在は堆積作用より下谷作用に転じているが、浸蝕力は弱く、開析谷の規模は比較的小さい。これに対し、地区の東側は基本的には高位の段丘面を占めており、扇端から離れるほど地下水位が低くなる。古代末以来、この高燥な地帯への井水の開削が繰り返し行なわれ、大井をはじめ多くの井水が開けられているほか、地区内の大小河川には人為的な改変が加えられてきた。

富の平遺跡は、笠松山系の支陵から連続する微高地の北東緩斜面上に位置し、遺跡の北側は臼井川の上流部にあたり、川幅も狭く、谷もそう深くない。また、調査地点の南側500ｍを茂都計川が東南東に流れており、深く開析している。本遺跡は、比較的陽当たりの良い緩斜面に位置し、集落を営むのに適した所といえる。（馬場保之）

2．歴史環境

伊賀良地区は埋蔵文化財包蔵地が濃密に分布しており、これまで発掘調査がなされた遺跡は、学術調査による立野・山口・西の原各遺跡、中央自動車道建設にかかる与志原・上の平東部・寺山・六反田・大東・酒屋前・滝沢井尻・小垣外（辻垣外）・三壺渕・上の金谷各遺跡、一般国道153号飯田バイパス建設にかかる殿原・八幡面・小垣外各遺跡、広域農道西部山麓線建設にかか

る飯田垣外・火振原・梅ケ久保・細田北・大原・直刀原各遺跡、諸開発に伴う中島平・宮ノ先・酒屋前・鳥屋平・下原・高野・公文所前・中村中平等の各遺跡がある。こうした文化財に表われた先人達の足跡は縄文時代早期までさかのぼる。立野遺跡や山口遺跡といった縄文時代早・前期の遺跡は主に笠松山麓の比較的標高の高い所に立地している。前期終末では辻垣外・殿原遺跡等扇状地の扇端付近の遺跡で竪穴住居址が調査されている。中期の遺跡は伊賀良地区の広範に分布しており、中央自動車道・西部山麓線路線にかかる扇状地上の諸遺跡や下原・公文所前といった段丘上の遺跡がある。殊に下原遺跡では該期の中心的役割を果たしたと考えられる大集落の一画が調査されている。後期中葉から晩期にかけては、茂都計川に面した中村中平遺跡で、配石址・竪穴住居址・配石墓等の遺構や土偶・土製耳飾り・石棒・石剣を含む多量の遺物が調査され、不明な点の多かった該期の様子が解明されると期待されている。また、酒屋前・辻垣外・殿原遺跡で断片的な資料ではあるが、遺構・遺物が確認されている。

弥生時代においても集落立地は基本的に前時代と変わらないと考えられるが、前期・中期についてはなお不明である。後期になると、遺跡数が増加するとともに調査例も増す。これまで調査された遺跡としては大東・上の金谷・酒屋前・滝沢井尻・宮ノ先・中島平・中村中平遺跡等がある。該期の集落展開としては、扇状地末端の湧水線および西方前山から東流する大小河川を利用した水田経営と高位段丘上での陸耕を基盤とするものが考えられる。殿原遺跡ではこれまで90軒にのぼる竪穴住居址が調査される等、大規模な集落が営まれていたことが判明している。また、細田北遺跡では標高700mを超える高所から2軒の竪穴住居址が発見されており、人口の爆発的な増加とこうした高所にまで生産基盤を拡大するまでに至る生産力の向上を看取できる。

古墳は伊賀良地区では52基が確認されているが、現存するものは9基にすぎない。隣接する竜丘・松尾地区に比べ数も少なく、いずれも規模の小さい円墳である。また、同時代の集落址の調査例は少なく、前期後半の上の金谷遺跡、後期の三壺渕・中島平遺跡、後期の中村中平遺跡が調査されているのみである。遺跡数も前時代に比べると著しく減少しており、湧水・湿地を控えた集落の展開が考えられる。中村中平遺跡では、遺跡北側の台地の縁に大名塚古墳が現存し、他に消滅したものとして中村狐塚古墳・寺畑古墳・宮原2号古墳があり、これらの築造を担った集落であろう。また、地区内北方地籍には条里が敷かれたとも指摘されており、水田経営の定着した姿を想定することができよう。

奈良時代については、具体的な遺構・遺物の調査例は中村中平遺跡のみであり、掘立柱建物址が単独で調査されたのみで、詳細は不明である。地区内には、古代東山道の経路および「育良駅」の推定地や、荘園を構成する村落の起源等に関連すると思われる箇所があり、重要な役割を果たした地区ということができる。

平安時代については、その末期には伊賀良庄の名が文書に登場する。そのなかには中村・久米・川路・殿岡が含まれることが文献等により明らかにされており、当地区がその中心的な位置を占めたことが考えられる。当地区における大規模な井水開発の歴史は、この時代にはじまるともい

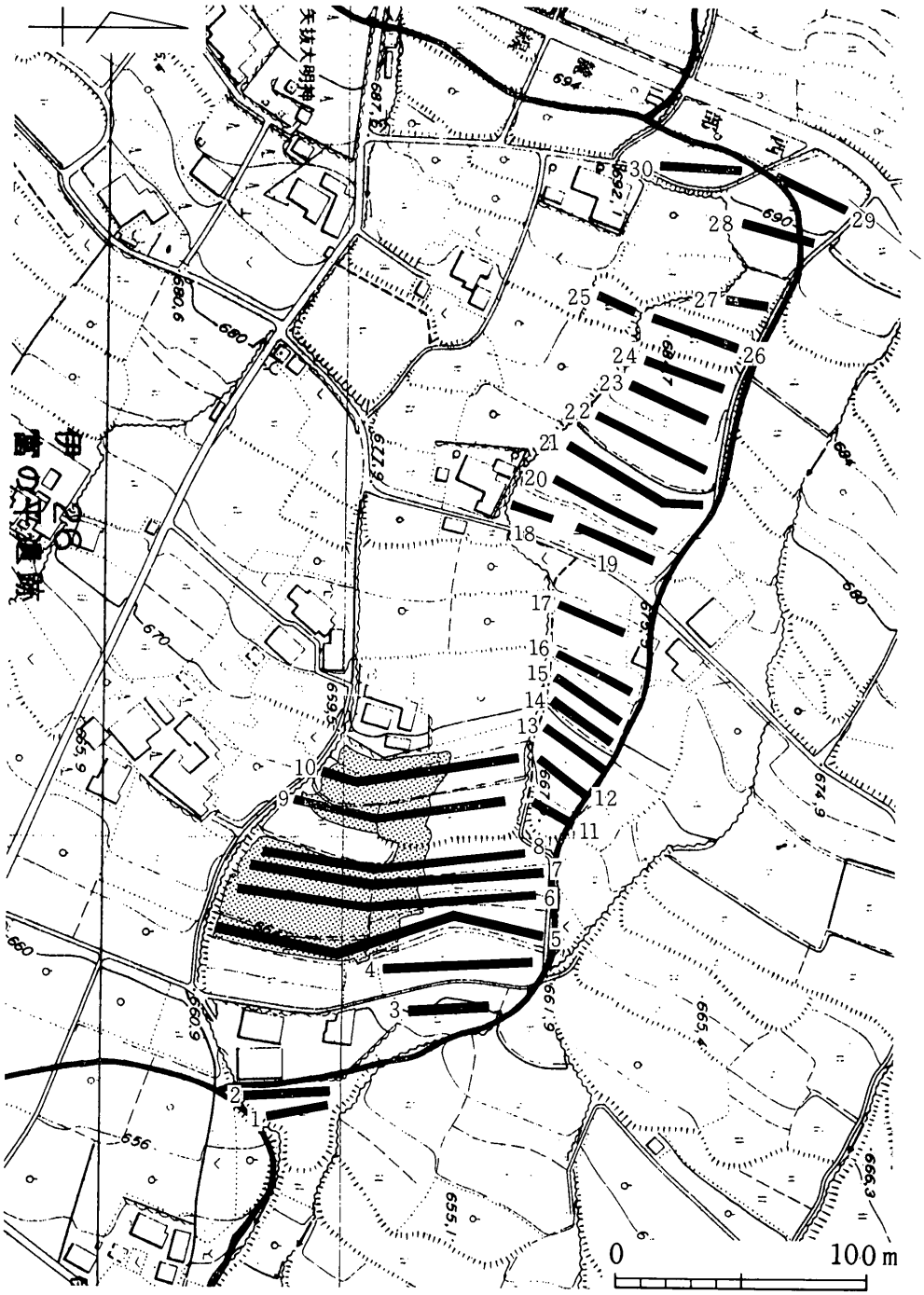
われている。殿原遺跡の調査結果はこうした説をある程度裏付けるものといえる。一方、これまで実施された発掘調査の結果、六反田・滝沢井尻・小垣外・三壺渕・上の金谷・宮ノ先・公文所前遺跡等地区内のほぼ全域にわたり、集落址の一部が調査されている。伊賀良庄の成立がどこまで遡るかは不明であるが、この時代の集落が前時代よりも増加することは、この地区の開発が一段と進んだ証左であろう。隣接する山本久米地区には真言宗の古刹光明寺がある。胎内に「保延六年」（1140年）の銘を持つ薬師如来坐像があることから、寺の創建はこれより遡ると考えられ、伊那谷の中ではいちはやく中央の文化を取り入れた先進地域の一つであったと思われる。また、さらに、この時代には三日市場地籍に須恵器を生産した土器（かわらけ）洞窯跡があり、ここで生産された須恵器が下伊那全域に分布するなど、手工業生産の発達がみられる。

中世においては鎌倉時代には北条時政が伊賀良庄地頭であり、以後一族の江馬氏がこれを継いだ。その地頭代が地区内に居を構えたことは疑いなく、鎌倉末期には荘園を自領化していたことが三浦和田文書に窺える。この時代の文化財としては、藤原様式の流れを汲む鎌倉初期の光明寺の阿弥陀如来坐像（国指定重要文化財）がある。

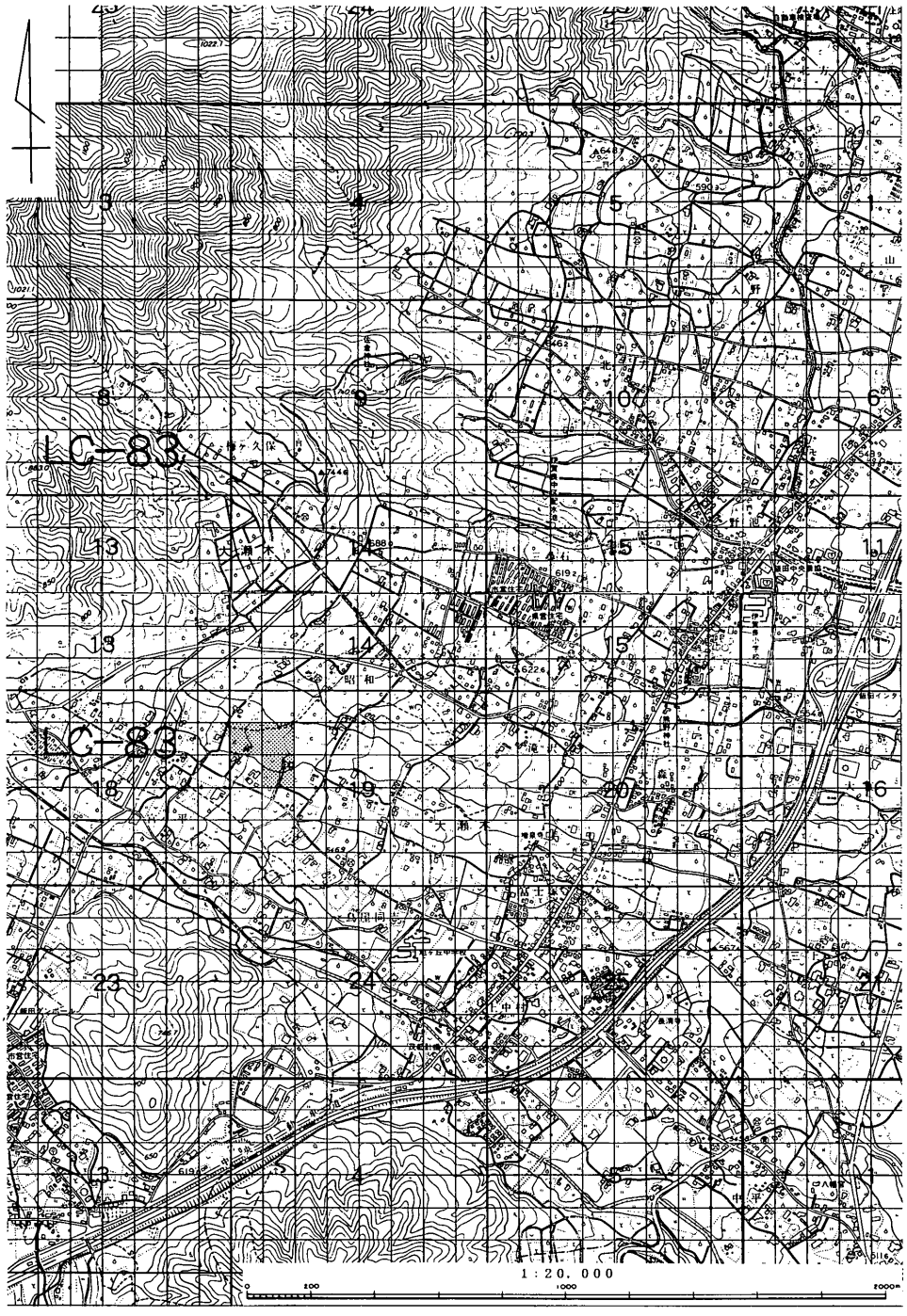
北条氏の滅亡後、信濃守護職小笠原氏は伊賀良庄を与えられ、その下で伊賀良地区の開発は急速に進んだとされる。地区内の井水の大半はこの時代の開発と考えられ、小笠原氏の勢力伸長の基盤として当地区が大きな役割を果たしたといえる。室町時代中期以降、小笠原氏内訌に伴い松尾城・鈴岡城の支城が各地に築かれ、地区内には下の城跡・桜山城跡がある。

以上、各時代について概観したが、こうした歴史の脈絡の中で、今次発掘調査の成果がどのように位置づけられるかは、本書の内容により明らかにされるといえる。（馬場保之）

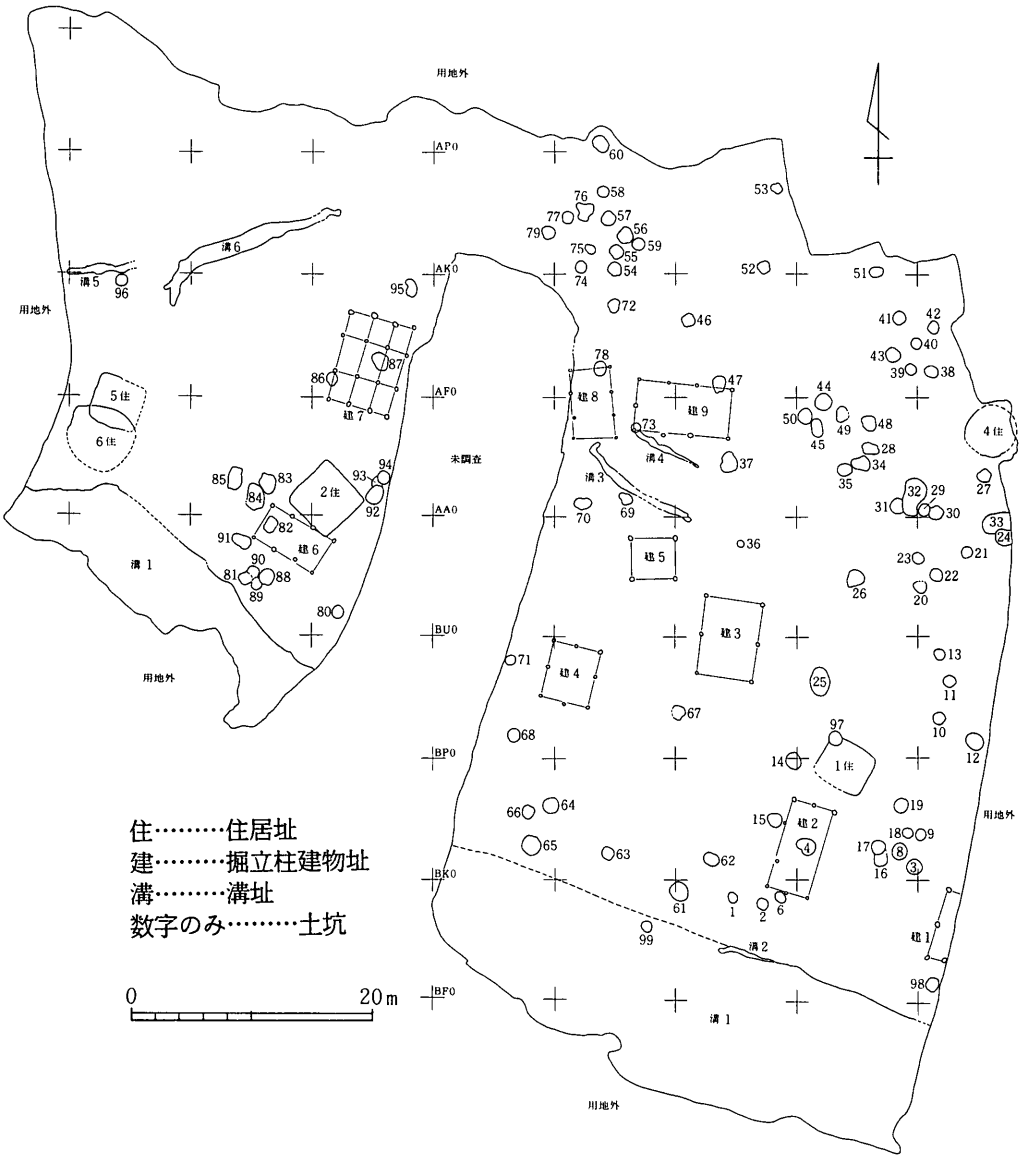
挿図２　事業実施予定範囲



挿図３　試掘及び本調査位置



挿図４　基準メッシュ図区画調査位置



挿図５　富の平遺跡遺構分布図

Ⅲ 調 査 結 果

1．試掘調査

事業予定地は、富の平遺跡の北側縁辺にあたり、南側はローム層が良好に残るのに対し、北側は全体的に低湿で、ところどころ島状に押出しと考えられる礫層が分布する。

1） 1～4トレンチ

1・2トレンチは、富の平遺跡の外縁部にあたり、傾斜が比較的急である。ローム層が良好に遺存するが、検出遺構・遺物はない。3・4トレンチ南側はローム層がわずかに遺存するが、削平を受けて遺構は確認されなかった。

2） 5～10トレンチ

南半でローム層が良好に残る。田面の造成に際し、多少削平・土盛りされており、遺構検出面は比較的浅いが、遺存状況は比較的良好である。遺構・遺物は、主にこの部分で確認されているが、わずかに北側低湿地の黒色粘質土からも流れ込みと思われる遺物が出土している。

縄文時代の遺構としては、竪穴住居址・多数の土坑等がある。6トレンチの中央付近、低湿地の際には、石組や焼土・炭を伴う穴があり、床面等は確認できなかったものの、竪穴住居址の炉と考えられる。各トレンチの南半には、やや疎らなもののさまざまな形や規模の土坑があり、土器が多く含まれるものがある。遺物は前期後半から後期にかけての土器・石器類が各トレンチで出土している。

9トレンチ南半中央に検出された竪穴住居址は、方形を呈し埋土が漆黒土であることから、詳細時期は不明であるが、弥生時代後期頃の住居址と考えられる。

各トレンチ南側を中心に多数の小柱穴が検出されており、特に5・8トレンチでは掘立柱建物址が確認されている。規模等から中世に比定される。また、中世以降と考えられる遺構として、各トレンチ南端に2条並んで検出された溝址がある。

3） 11～30トレンチ

22トレンチ南端および25トレンチにローム層が確認されたのみで、他は全体的に低湿地状を呈し、ところどころ島状に押出しと考えられる礫層が分布する。11・13～15トレンチにわずかに小柱穴が検出されたほかは遺構はなく、出土遺物も皆無である。

上述の試掘結果に基づいて、5～10トレンチについて、本発掘調査の実施が必要であると判断された。（馬場保之）

2．竪穴住居址

（1）縄文時代

①４号住居址（挿図６）

検出位置		AD－22	覆土			
重複	切る		床面			
	切られる		住居内施設	主柱穴		P1～P5
規模・形状	平面形	円形		貯蔵穴		
	規模m	4.2×4.3		入口		
	主軸	N44° W		炉・竈	形状	石囲炉
	壁高cm	9			規模cm	102×74
	壁状態	緩やか			特記事項	

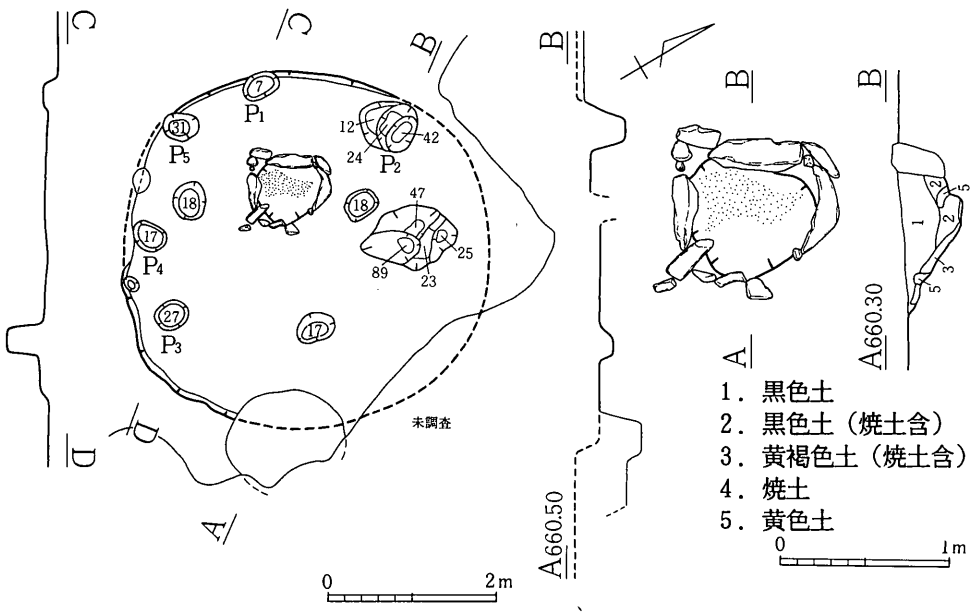
出土遺物（図１・12）

深鉢片

打製石斧２　横刃型石器１

特記事項

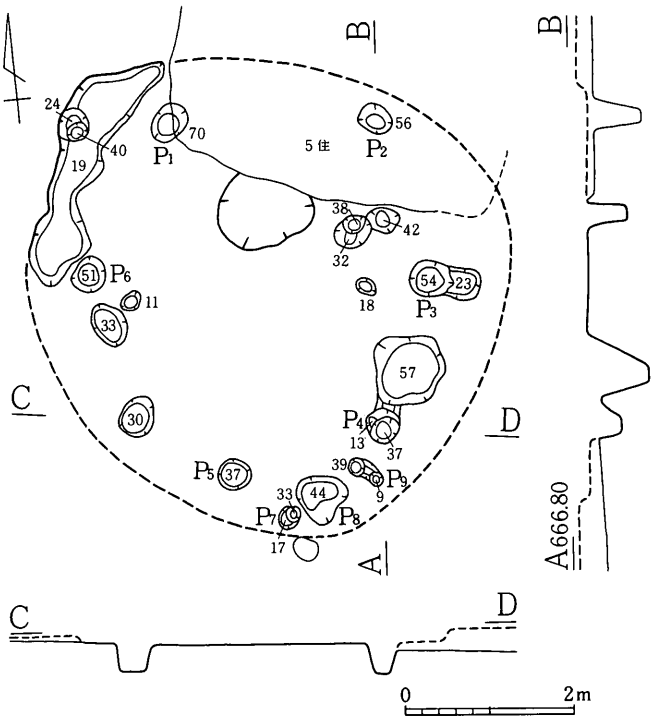
時期	縄文時代中期後半	根拠	住居形態　（吉川　豊）



挿図６　４号住居址

②6号住居址（挿図7）

検出位置		AC−36	覆土			
重複	切る		床面			不明瞭
	切られる	5住	住居内施設	主柱穴		P1〜P6
規模・形状	平面形	円形		貯蔵穴		
	規模m	(5.4)×(5.6)		入口		P7〜P9
	主軸	N 9° E		炉・竈	形状	石囲炉（抜石されている）
	壁高cm	0			規模cm	112×(80)
	壁状態				特記事項	
出土遺物（図　） なし						
特記事項						
時期	縄文時代中期後葉		根拠	住居址形態		（吉川　豊）



挿図7　6号住居址

(2) 弥生時代～古墳時代

①1号住居址（挿図8）

検出位置		BO－17	覆土			
重複	切る		床面			貼床
	切られる	土坑97	住居内施設	主柱穴		P1～P4
規模・形状	平面形	隅丸長方形		貯蔵穴		
	規模m	(4.3)×3.8		入口		P5・P6
	主軸	N61° W		炉・竈	形状	地床炉
	壁高cm	18			規模cm	82×62
	壁状態	やや緩やか			特記事項	

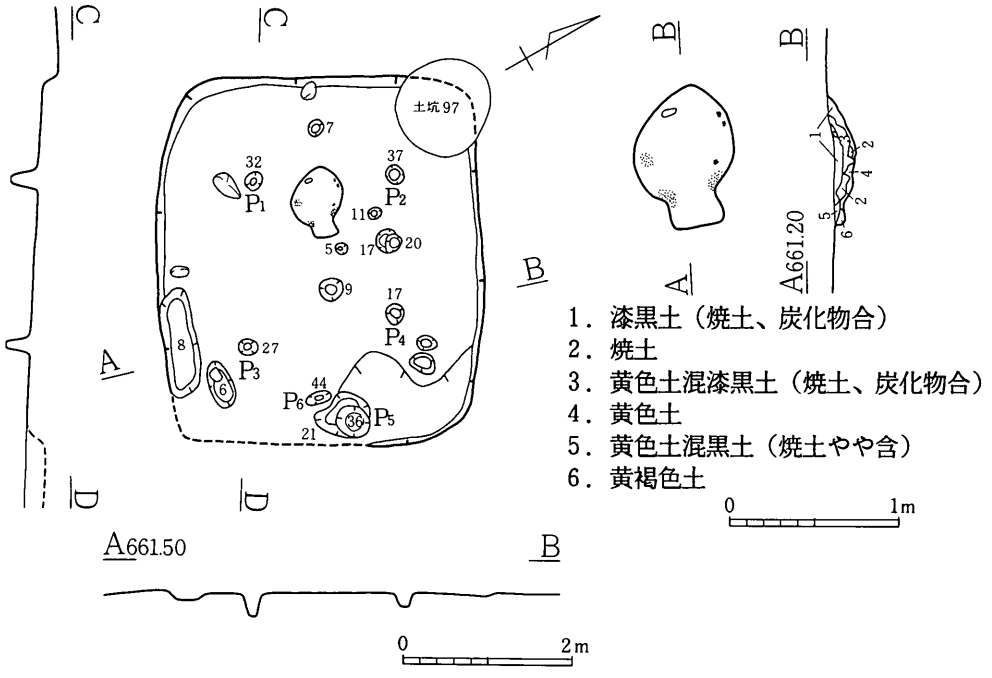
出土遺物（図12）

打製石斧1　横刃型石器1

特記事項

焼失家屋

時期	弥生後期～古墳前期	根拠	住居址形状　（吉川　豊）



挿図8　1号住居址

②５号住居址（挿図９）

検出位置		AE－36	覆土			単層　黒褐色土
重複	切る	６住	床面			良好な貼床
	切られる		住居内施設	主柱穴		P1～P4
規模・形状	平面形	隅丸方形		貯蔵穴		
	規模m	(4.1×4.0)		入口		P5
	主軸	N70° W		炉・竈	形状	炉縁石を有する地床炉
	壁高cm	13			規模cm	60×46
	壁状態	緩やか			特記事項	

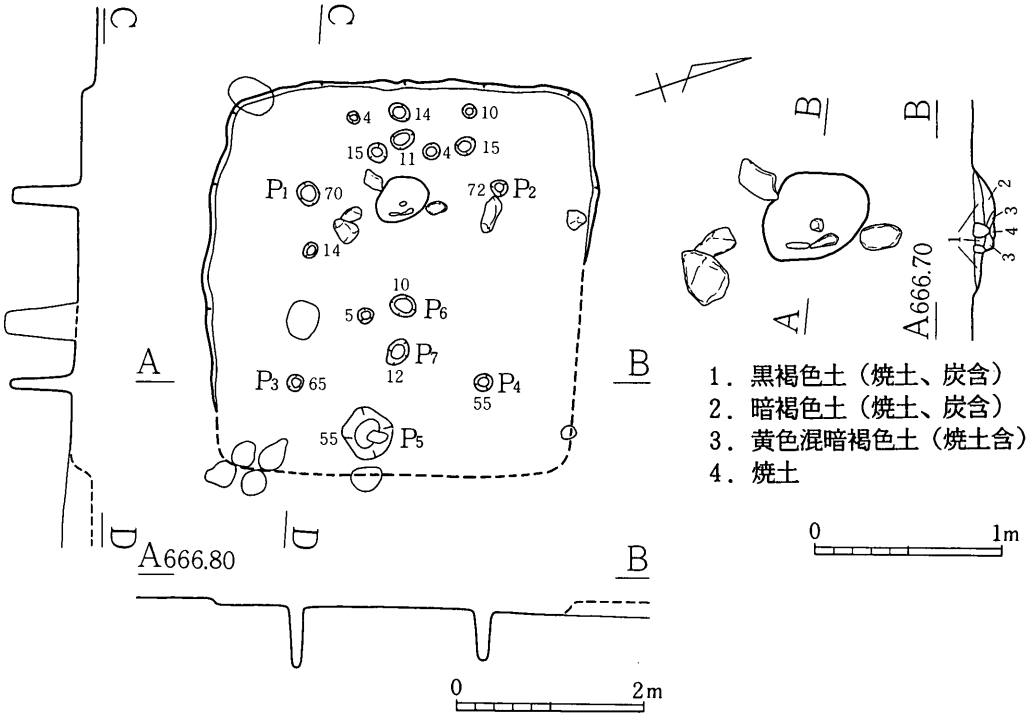
出土遺物（図　）

土器は図示できない小片が出土

特記事項

P6・P7は間仕切りピット

時期	弥生後期～古墳前期	根拠	出土遺物　（吉川　豊）



挿図９　５号住居址

(3) 古墳時代

①2号住居址（挿図10）

検出位置		AA－45	覆土			自然埋没
重複	切る		床面			良好
	切られる	建6	住居内施設	主柱穴		P1～P4
規模・形状	平面形	隅丸方形		貯蔵穴		
	規模m	4.7×4.7		入口		P5・P6
	主軸	N136° W		炉・竈	形状	地床炉
	壁高cm	59			規模cm	62×58
	壁状態	ほぼ垂直			特記事項	

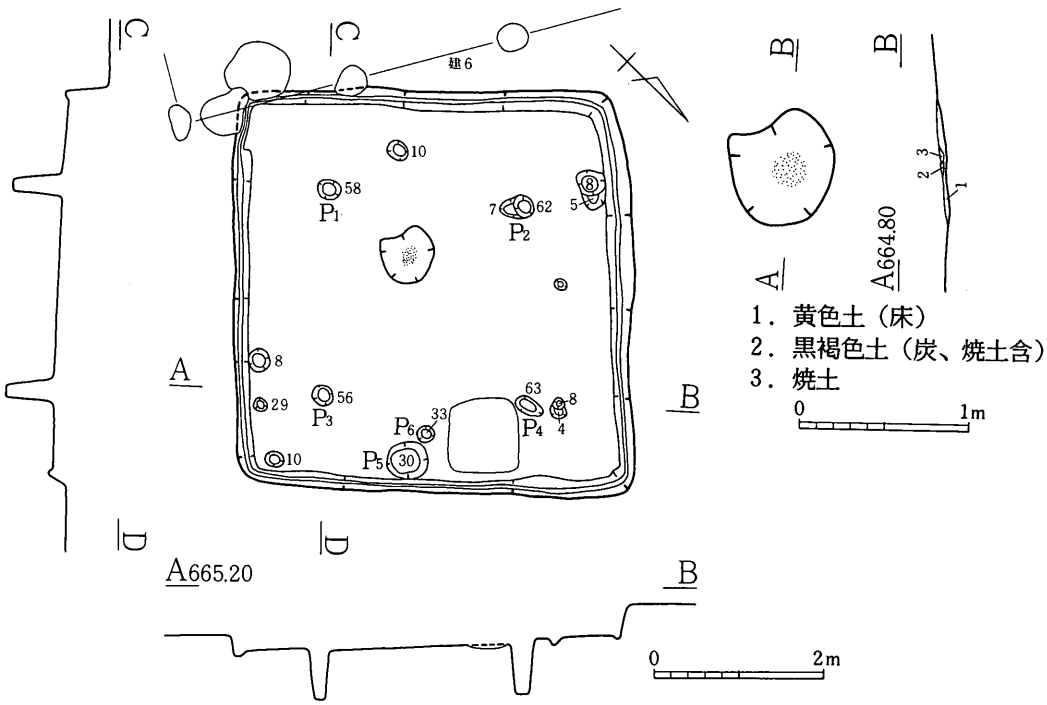
出土遺物（図1・12）

土師器甕2　高坏7

打製石斧3

特記事項

時期	古墳時代前期後半	根拠	出土遺物　（吉川　豊）

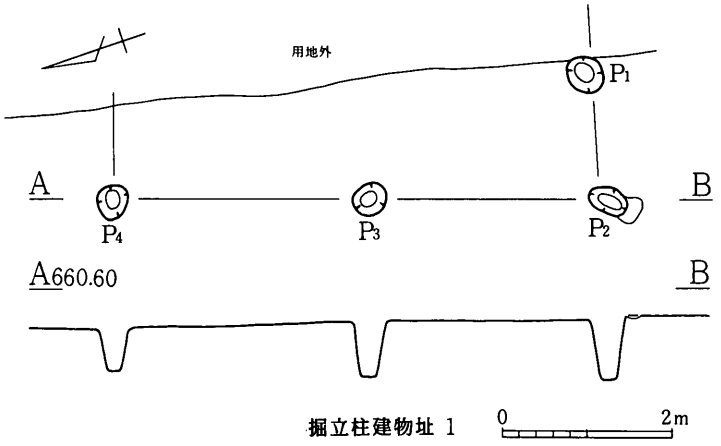


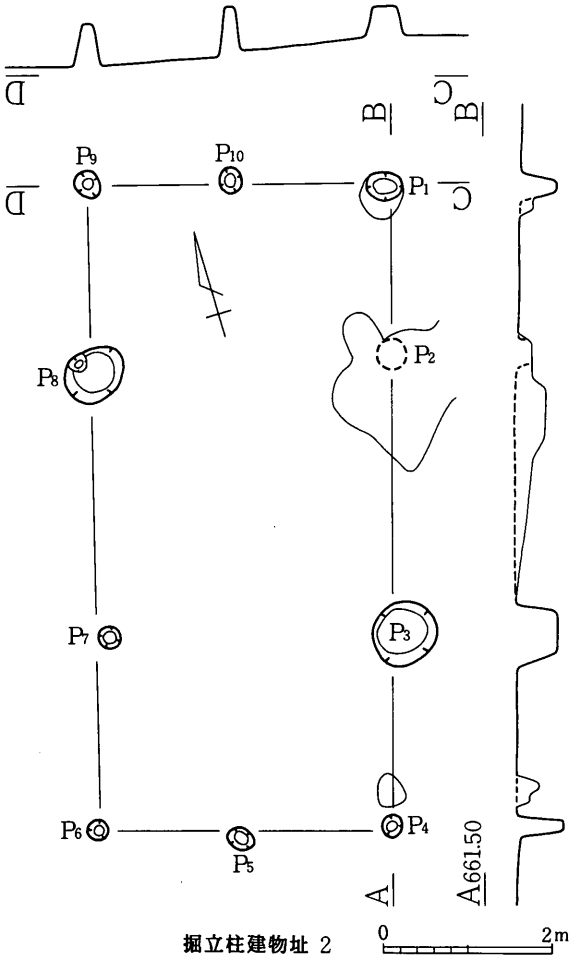
挿図10　2号住居址

3．掘立柱建物址

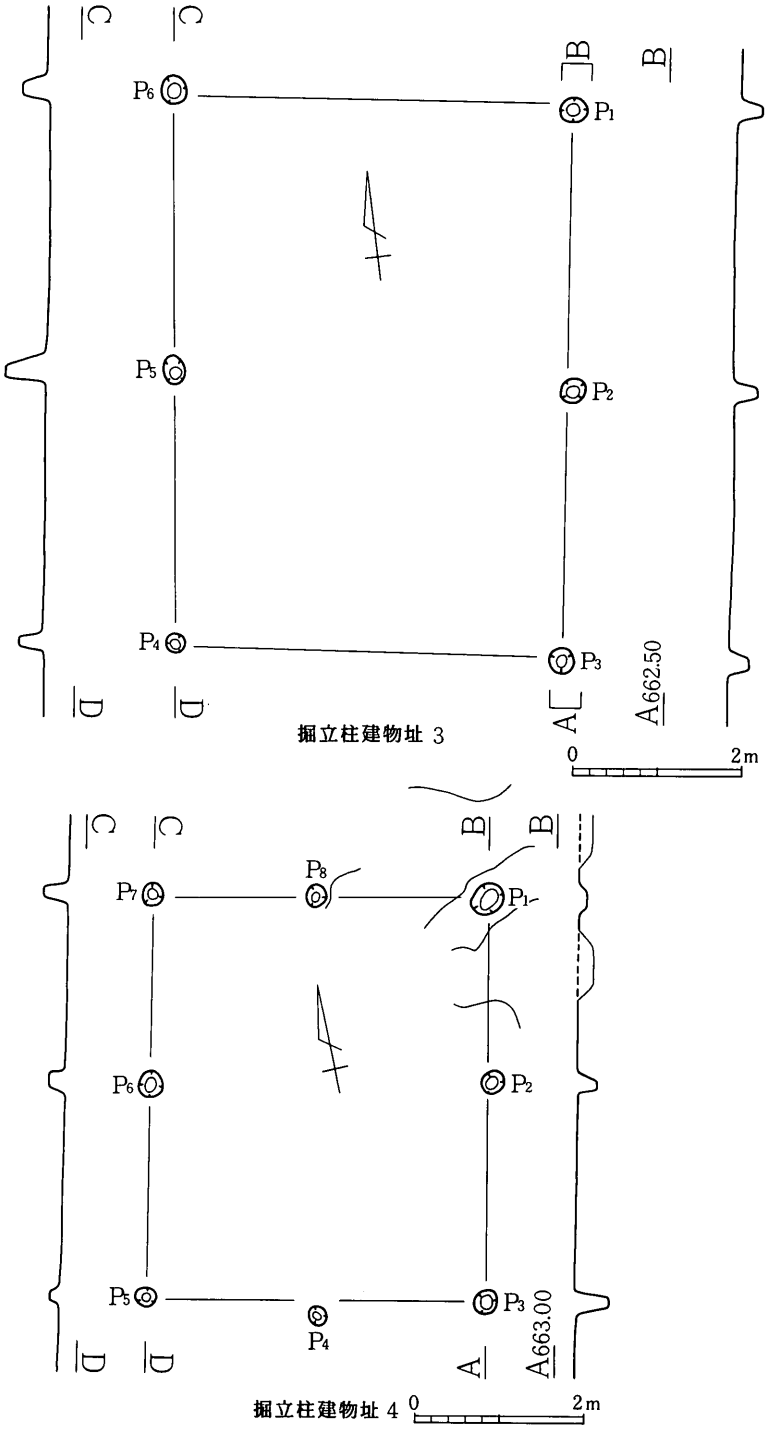
No.	挿図No.	検出位置	規模(梁行×桁行)m 桁　行　方　向	柱間m	覆　土	時代・時期	出土遺物	備考
1	11	ＢＪ－21	(1.8)×6.2 N19° E	梁 3.8 桁 4.9	黒色土	中世	なし	側柱
2	11	ＢＫ－14	3.7×7.8 N18° E	梁 4.4 桁 6.3	黒色土	中世	なし	側柱
3	12	ＢＴ－12	4.8×6.7 N 8° E	梁 4.6 桁 3.2	黒色土	中世	なし	側柱
4	12	ＢＳ－5	4.2×5.0 N13° E	梁 2.0 桁 2.4	黒色土	中世	なし	側柱
5	13	ＢＸ－9	3.4×3.7 N 1° W	梁 8.5 桁 9.3	黒色土	中世	なし	側柱
6	13	ＢＸ－44	3.2×5.8 N59° W	梁 6.3 桁 2.0	黒色土	中世	なし	側柱
7	14	ＡＧ－47	5.4×8.0 N17° E	梁 1.7 桁 2.5	黒色土	中世	なし	総柱
8	15	ＡＥ－6	3.5×5.9 N 5° W	梁 3.5 桁 2.0	黒色土	中世	なし	側柱
9	16	ＡＥ－10	4.4×8.1 N96° E	梁 5.2 桁 6.5	黒色土	中世	なし	側柱

（吉川　豊）

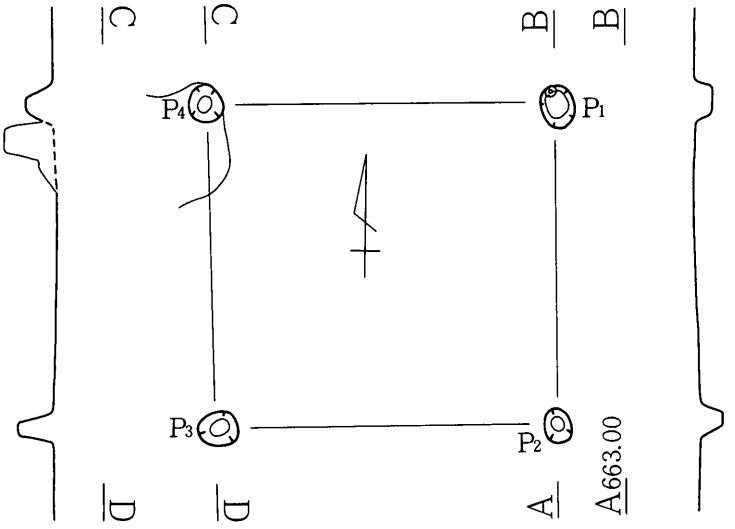




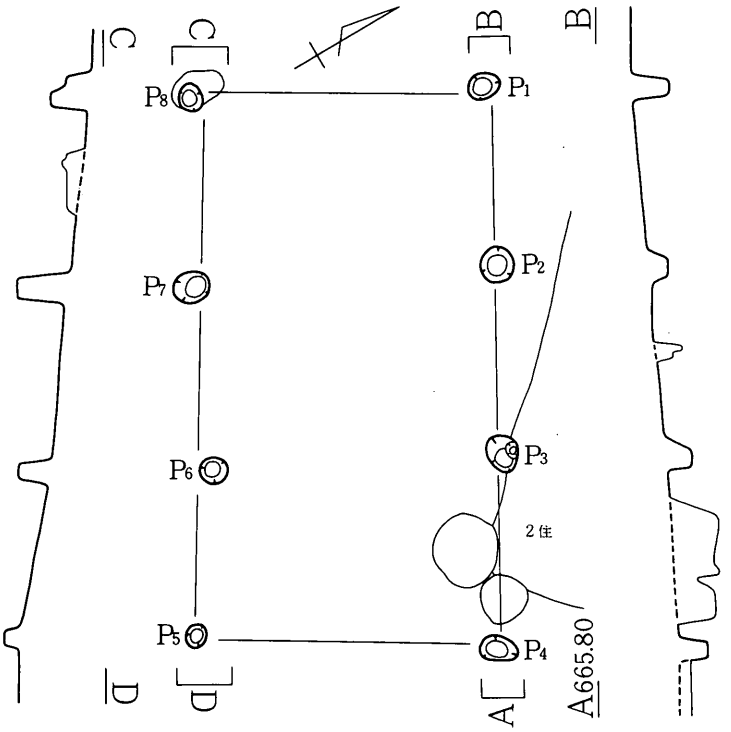
挿図11　掘立柱建物址１・２



挿図12　掘立柱建物址３・４

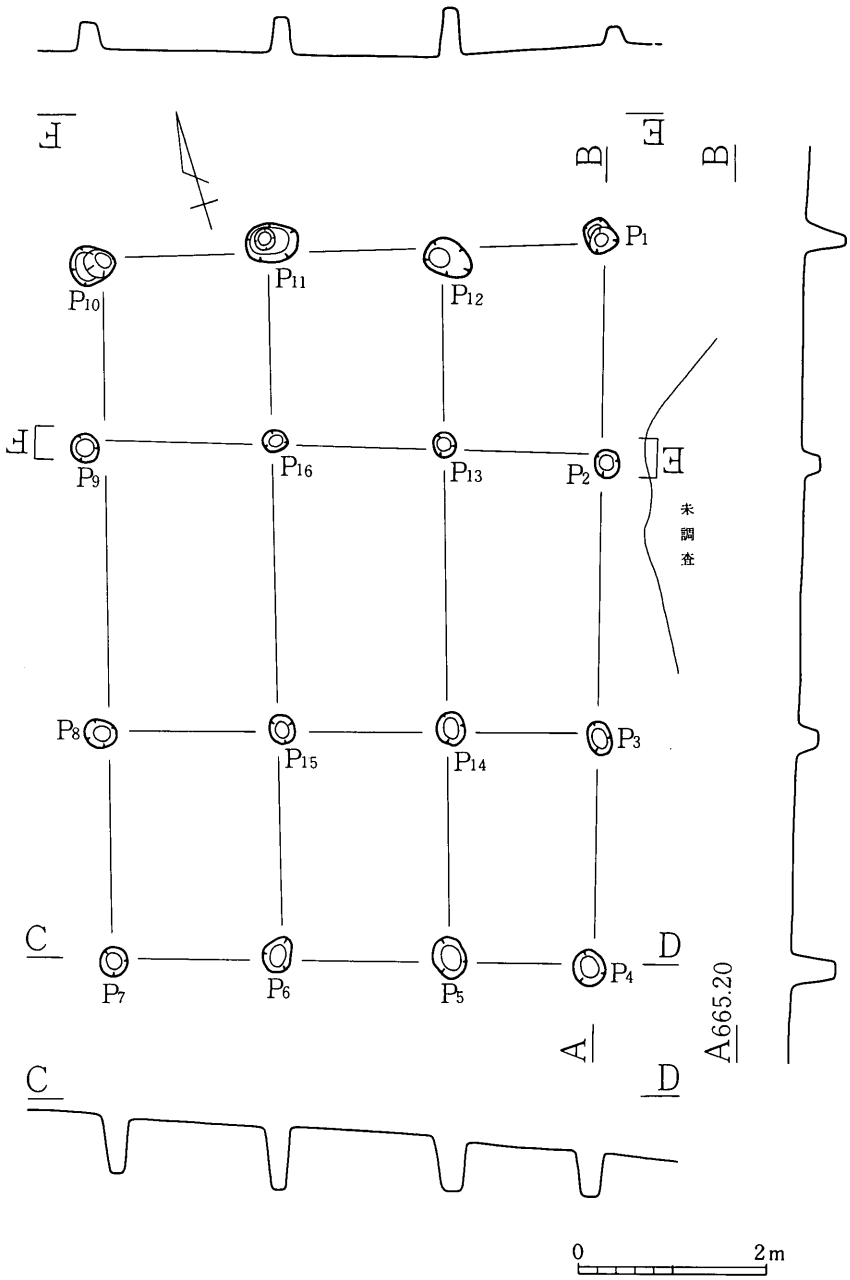


掘立柱建物址 5　0　2m

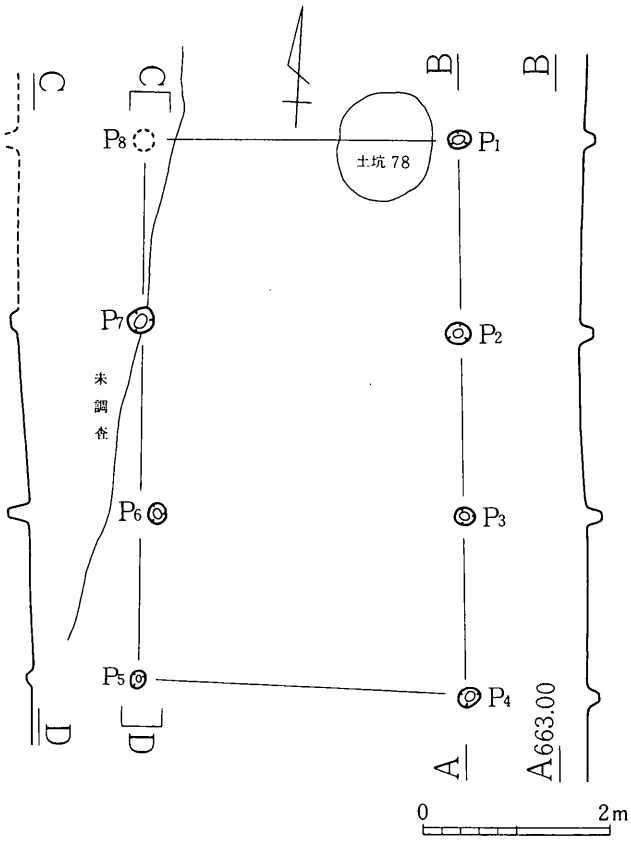


掘立柱建物址 6　0　2m

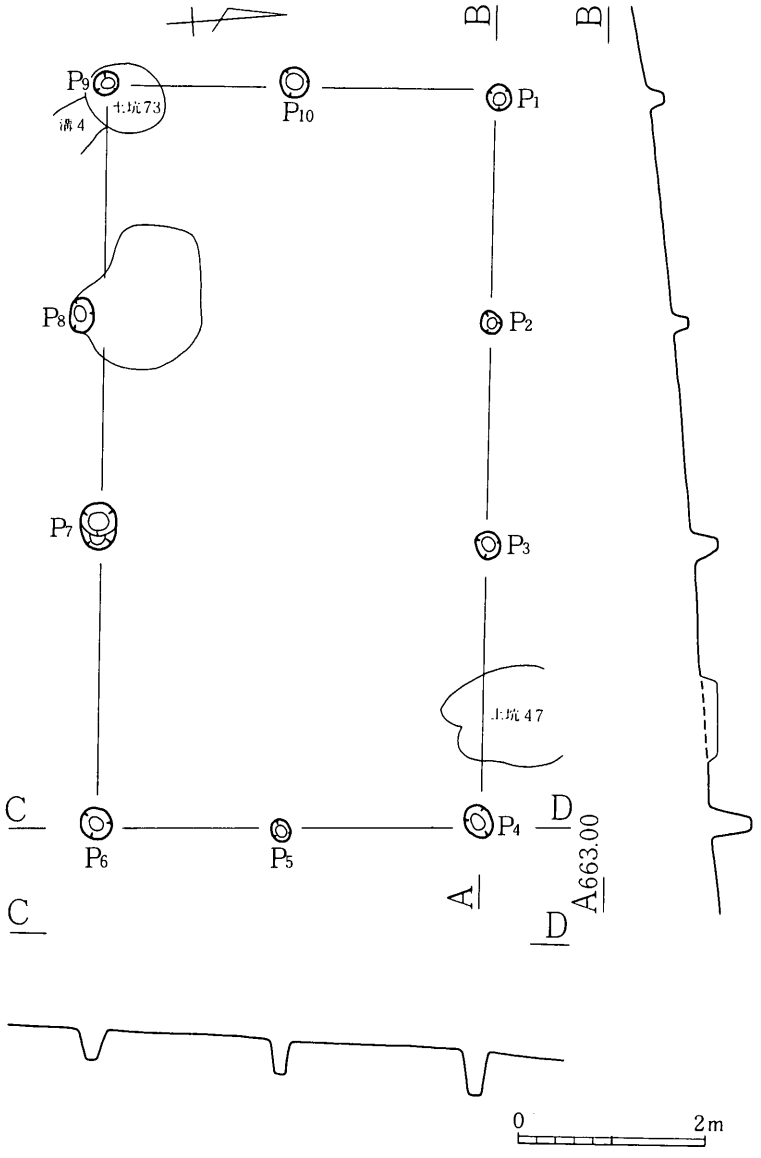
挿図13　掘立柱建物址 5 ・ 6



挿図14　掘立柱建物址 7



挿図15　掘立柱建物址 8



挿図16　掘立柱建物址 9

4．土坑

No.	挿図No.	検出位置	規模(長×短×深)cm	形　態	覆土	時代・時期	出　土　遺　物	備考
1	17	ＢＪ－12	92×80×35	円　形				
2	17	ＢＪ－13	96×92×46	円　形				
3	17	ＢＫ－19	124×120×57	円　形		縄文中期初	深鉢片打斧２　砥石１	
4	17	ＢＬ－15	164×112×26	楕円形				
5			欠　　番					
6	17	ＢＪ－14	100×76×17	楕円形				
7			欠　　番					
8	17	ＢＬ－19	140×128×52	円　形		縄文中期初	深鉢片	
9	17	ＢＬ－20	84×84×64	円　形		縄文中期初	深鉢片	
10	17	ＢＱ－20	100×96×97	円　形			深鉢片	
11	17	ＢＳ－21	104×100×101	円　形				
12	18	ＢＰ－22	152×128×75	楕円形				
13	17	ＢＴ－20	92×88×58	円　形				
14	18	ＢＯ－14	144×116×106	楕円形				
15	18	ＢＭ－14	128×116×16	円　形		縄文中期初	深鉢片　打斧１	
16	17	ＢＫ－18	(104)×112×38	楕円形		縄文中期初	深鉢片　打斧１	
17	17	ＢＬ－18	112×112×89	円　形				
18	17	ＢＬ－19	88×80×30	円　形			深鉢片	
19	18	ＢＮ－19	116×116×74	円　形				
20	18	ＢＷ－20	116×(76)×34	不定形		縄文中期中	深鉢片　打斧１石錘１	
21	18	ＢＸ－22	96×88×60	円　形		縄文中期初	深鉢片	
22	18	ＢＷ－20	100×92×45	円　形		縄文中期初	深鉢片　打斧１	
23	18	ＢＸ－20	96×88×29	円　形		縄文中期初	深鉢片浅鉢１　横刃２敲打１	
24	18	ＢＹ－23	(128)×132×91	楕円形		縄文中期初	深鉢片　打斧１	
25	18	ＢＳ－15	244×156×34	楕円形		縄文中期初	深鉢片	
26	18	ＢＷ－17	160×132×71	不定形				
27	18	ＡＢ－22	112×108×58	円　形		縄文中期初	深鉢片　打斧２	
28	19	ＡＣ－17	120×100×36	楕円形		縄文中期初	深鉢片	
29	19	ＡＡ－20	112×100×46	円　形		縄文中期初	深鉢片	
30	19	ＡＡ－20	(112)×120×50	不定形		縄文中期初	深鉢片	

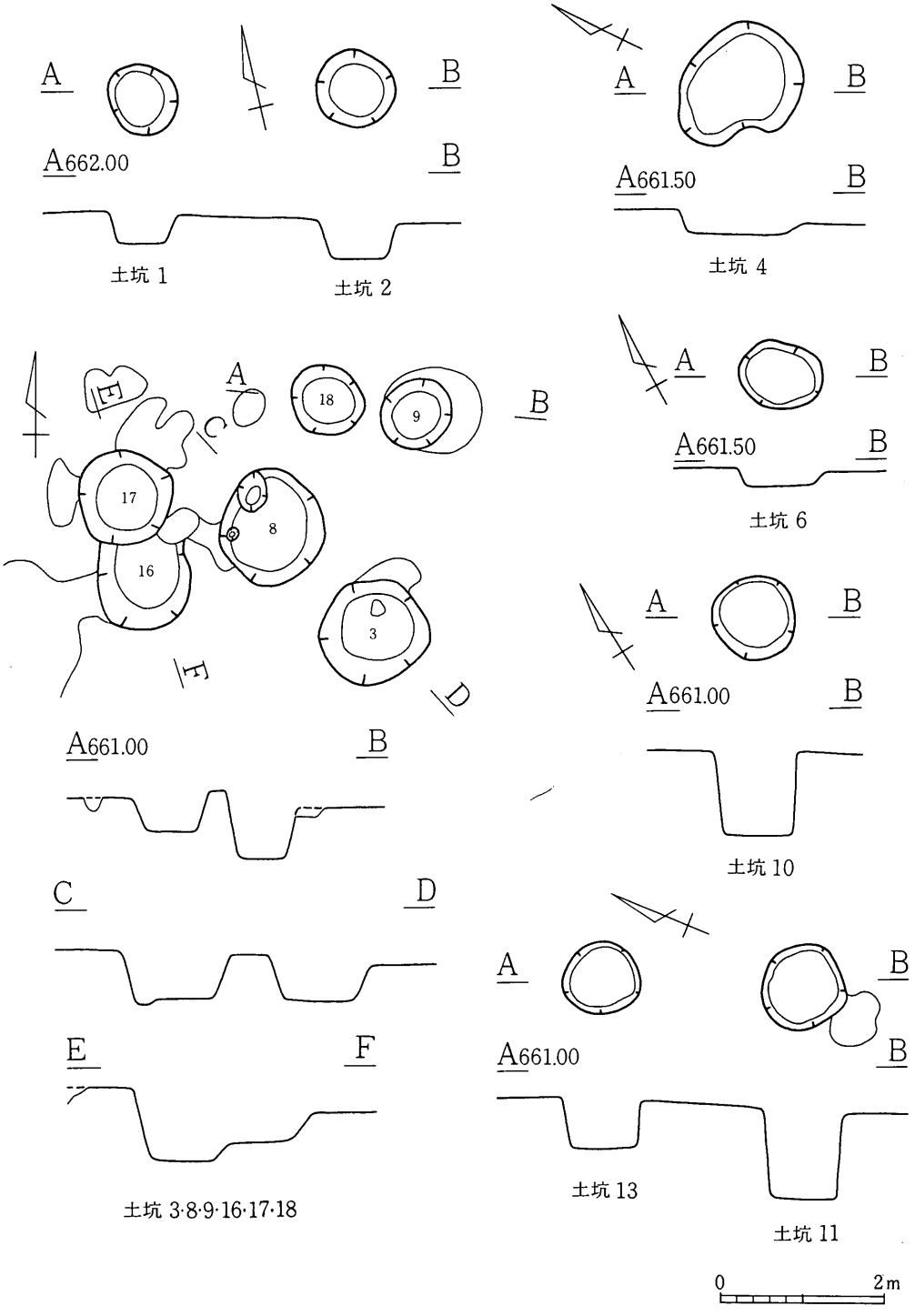
※打斧…打製石打斧　横刃…横刃型石器　敲打…敲打器　磨斧…磨製石斧

No.	挿図No.	検出位置	規模(長×短×深)cm	形　態	覆土	時代・時期	出　土　遺　物	備考
31	19	ＡＡ－19	124×(104)×30	円　形		縄文中期初	深鉢片　打斧２横刃１	
32	19	ＡＡ－19	308×176×43	不定形		縄文中期初	深鉢片　打斧１	
33	18	ＢＹ－23	(236)×168×23	楕円形				
34	19	ＡＣ－17	156×100×17	楕円形				
35	19	ＡＢ－16	120×100×41	楕円形			深鉢片	
36	19	ＢＸ－12	52×56×23	楕円形		縄文中期	深鉢片	
37	19	ＡＣ－12	172×124×19	円　形			打斧１	
38	19	ＡＧ－20	112×100×26	楕円形			打斧１	
39	19	ＡＧ－19	96×92×41	円　形		縄文中期初	深鉢片	
40	19	ＡＨ－19	92×88×29	円　形			深鉢片	
41	19	ＡＩ－19	112×108×27	円　形			横刃１	
42	19	ＡＨ－20	100×84×39	円　形		縄文中期初	深鉢片　打斧１	
43	19	ＡＧ－18	120×112×50	円　形		縄文中期初	深鉢片	
44	20	ＡＥ－16	136×128×57	円　形		縄文中期初	深鉢片　打斧６	
45	20	ＡＤ－15	160×88×90	楕円形		縄文中期初	深鉢片　打斧１横刃１	
46	19	ＡＩ－10	108×100×25	隅丸方形		縄文中期初	深鉢片　打斧１	
47	20	ＡＦ－11	144×108×17	不定形				
48	20	ＡＤ－18	124×108×17	不定形				
49	20	ＡＥ－16	1228×(88)×39	楕円形		縄文中期初	深鉢片	
50	20	ＡＥ－15	120×112×51	円　形				
51	20	ＡＫ－18	118×88×57	楕円形		縄文中期初	深鉢片	
52	20	ＡＫ－13	100×100×20	円　形		縄文中期	深鉢片	
53	20	ＡＮ－14	96×84×30	不定形				
54	20	ＡＫ－７	108×108×20	円　形			打斧１	
55	20	ＡＫ－７	112×100×15	円　形		縄文中期初	深鉢片　打斧２	
56	20	ＡＬ－７	140×128×14	円　形		縄文中期初	深鉢片	
57	20	ＡＭ－７	120×120×55	円　形		縄文中期初	深鉢片　打斧２横刃２	
58	21	ＡＭ－７	92×92×21	円　形		縄文中期初	深鉢片	
59	20	ＡＬ－８	108×100×41	円　形			深鉢片	
60	21	ＡＰ－６	(144)×108×32	楕円形			深鉢片	

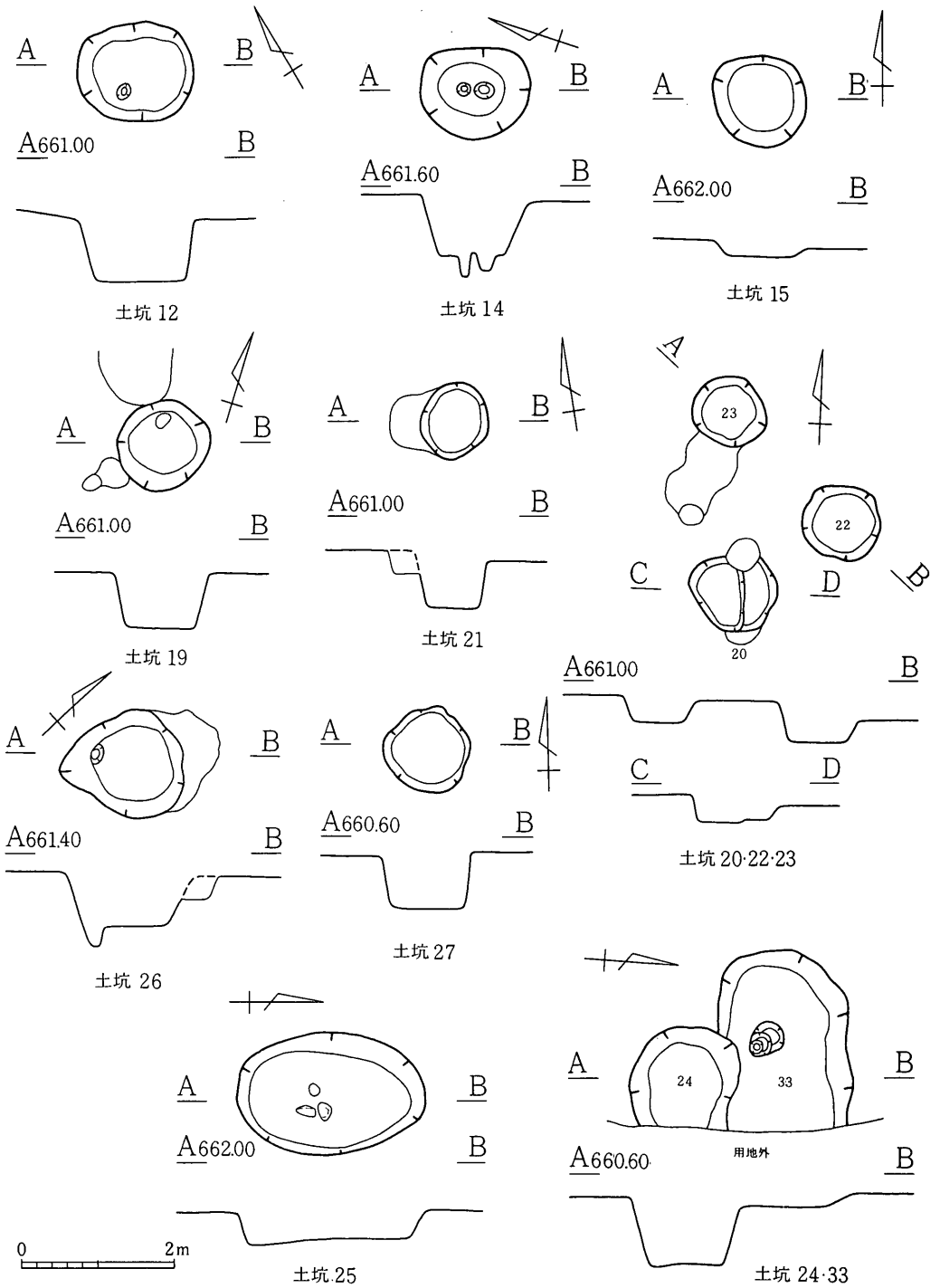
No.	挿図No.	検出位置	規模(長×短×深)cm	形　態	覆土	時代・時期	出　土　遺　物	備考
61	21	ＢＪ－10	(160)144×63	不定形		縄文中期初	深鉢片	
62	21	ＢＫ－11	128×104×81	楕円形		縄文中期初	深鉢片　打斧２	
63	21	ＢＬ－７	116×104×22	円　形		縄文中期初	深鉢片　打斧１	
64	21	ＢＫ－６	132×132×61	円　形		縄文中期初	深鉢片　打斧２敲打１	
65	21	ＢＬ－６	172×160×61	円　形			打斧２	
66	21	ＢＭ－５	112×100×27	円　形			深鉢片　打斧１横刃１	
67	21	ＢＱ－10	112×104×102	不定形		縄文中期初	深鉢片	
68	21	ＢＰ－３	108×100×26	円　形			打斧１横刃１	
69	21	ＡＡ－７	128×84×37	不定形			打斧２	
70	21	ＡＡ－６	108×88×61	不定形		縄文中期初	深鉢片	
71	22	ＢＴ－３	84×80×26	円　形			深鉢片	
72	22	ＡＩ－７	120×88×39	不定形				
73	22	ＡＤ－８	84×72×35	円　形			深鉢片	
74	22	ＡＫ－６	96×92×25	円　形		縄文中期初	深鉢片　打斧３	
75	22	ＡＫ－６	96×72×14	不定形		縄文中期初	深鉢片　打斧１横刃１	
76	22	ＡＭ－６	156×156×18	不定形		縄文中期初	深鉢片　横刃１	
77	22	ＡＭ－５	100×92×49	円　形			深鉢片　打斧２	
78	22	ＡＧ－６	120×96×58	円　形		縄文中期初	深鉢片　打斧２横刃２	
79	22	ＡＬ－４	108×104×37	円　形			打斧５	
80	22	ＢＵ－46	108×96×55	円　形		縄文中期初	深鉢片　打斧２敲打１	
81	23	ＢＷ－42	(104)×98×33	円　形				
82	22	ＢＹ－43	132×92×33	隅丸長方形				
83	23	ＡＢ－43	148×140×20	不定形				
84	23	ＡＡ－42	200×140×62	不定形			磨斧	
85	23	ＡＢ－41	180×116×33	不定形				
86	23	ＡＦ－45	112×92×32	不定形				
87	23	ＡＧ－48	128×(56)×60	不定形				
88	23	ＢＷ－43	132×116×23	円　形				
89	23	ＢＷ－42	(92)×84×16	円　形				
90	23	ＢＷ－42	(68)×100×26	隅丸方形				

No.	挿図No.	検出位置	規模(長×短×深)cm	形　態	覆土	時代・時期	出　土　遺　物	備考
91	23	ＢＸ－42	164×96×22	隅丸長方形				
92	23	ＡＡ－47	164×128×25	楕円形				
93	23	ＡＢ－47	×80×21	不定形				
94	23	ＡＢ－47	104×96×65	円　形				
95	23	ＡＪ－49	148×72×43	不定形				
96	23	ＡＪ－37	96×92×62	円　形				
97	29	ＢＰ－16	116×104×34	円　形				
98	29	ＢＦ－20	112×108×36	円　形				
99	29	ＢＩ－８	96×80×52	円　形				

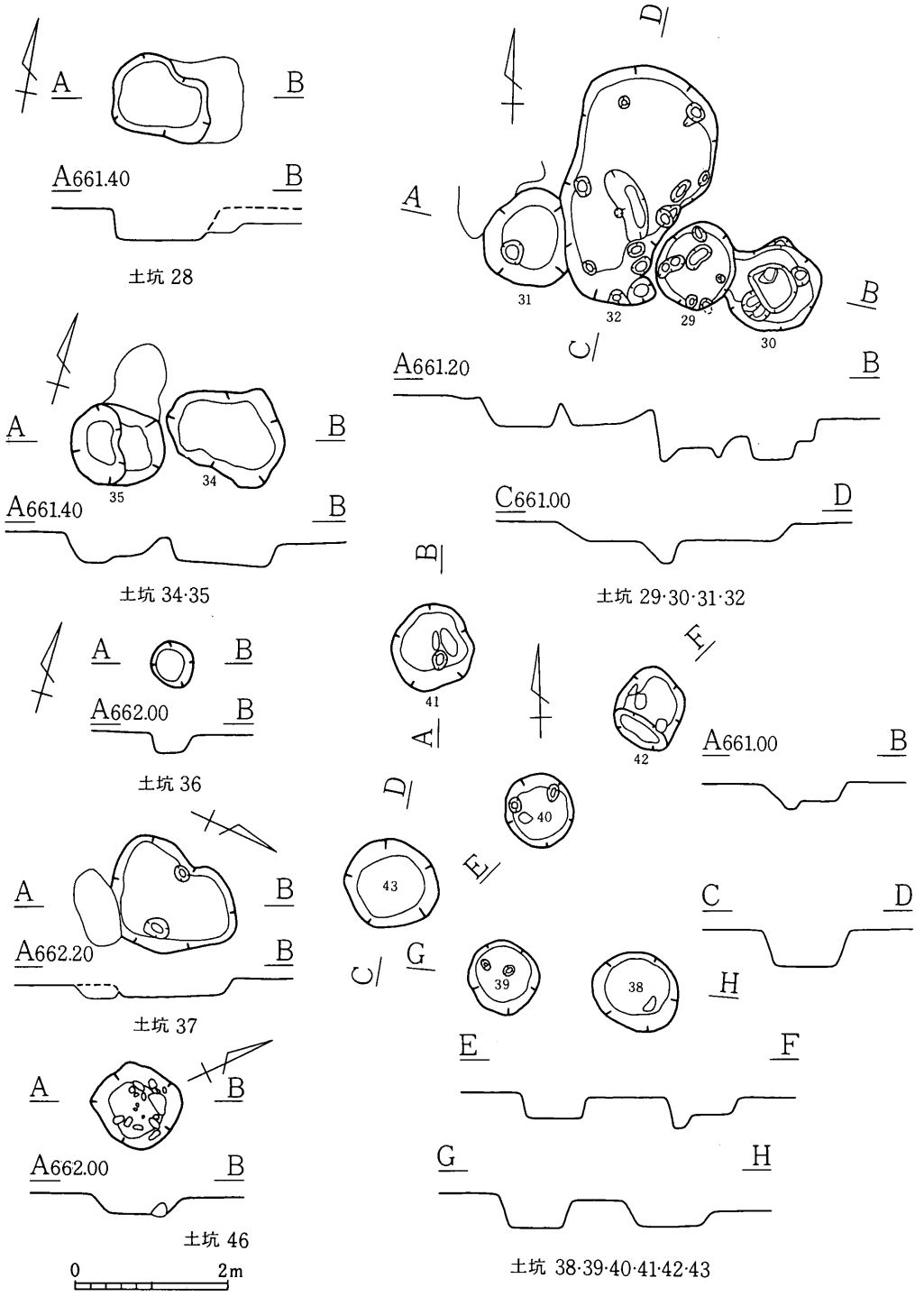
（吉川　豊）



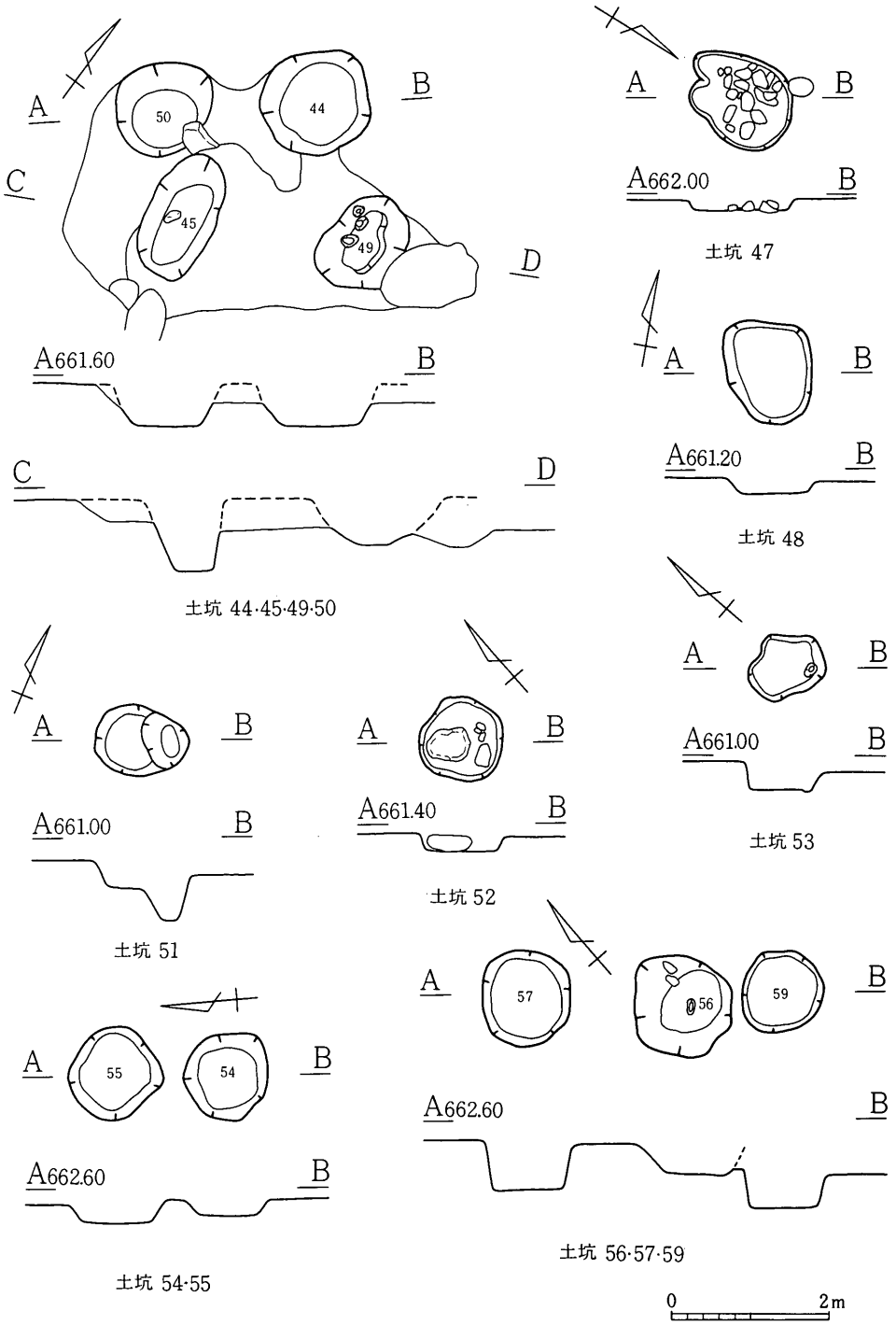
挿図17　土坑1～4・6・8～11・13・16～18



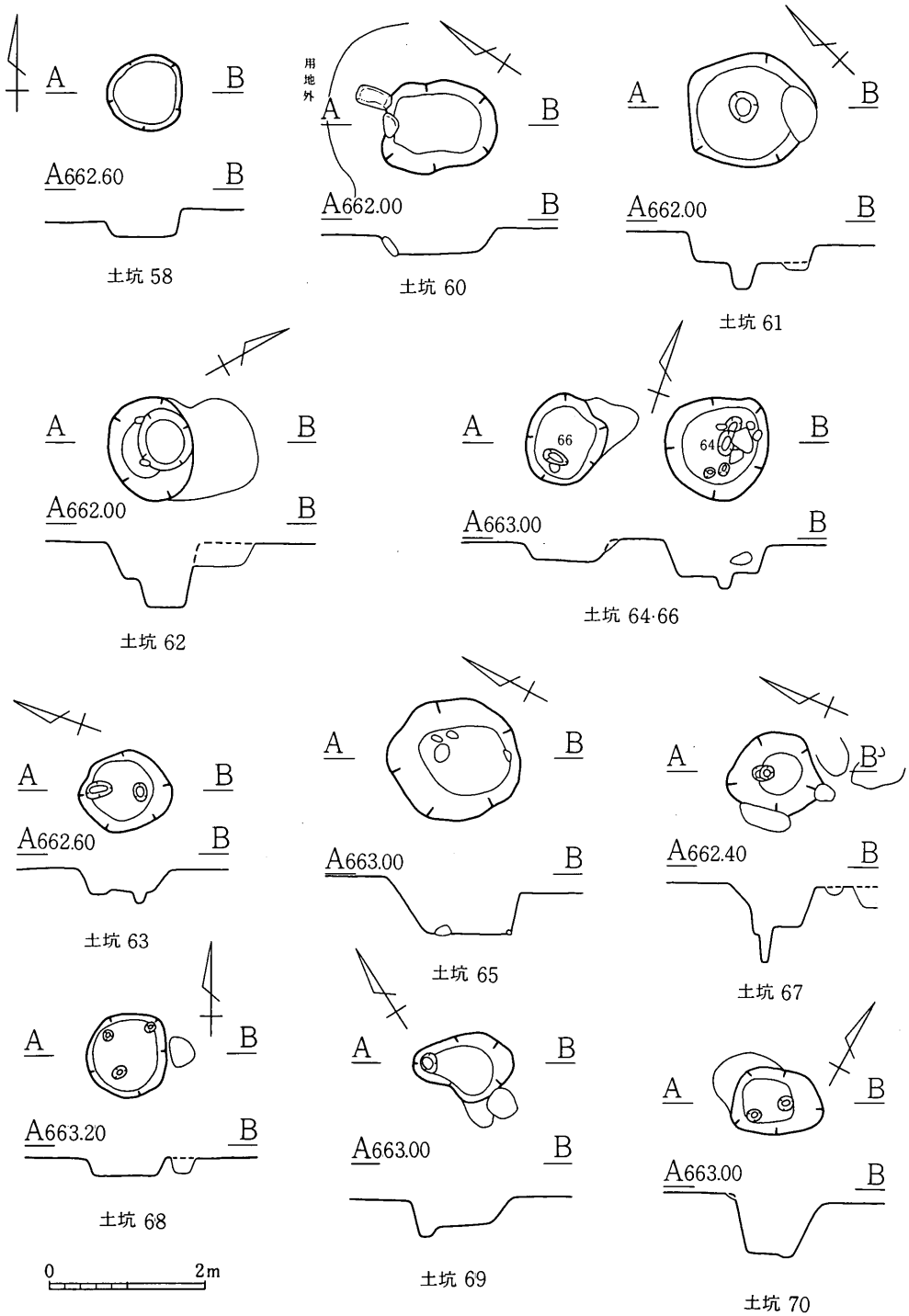
挿図18　土坑12・14・15・19～27・33



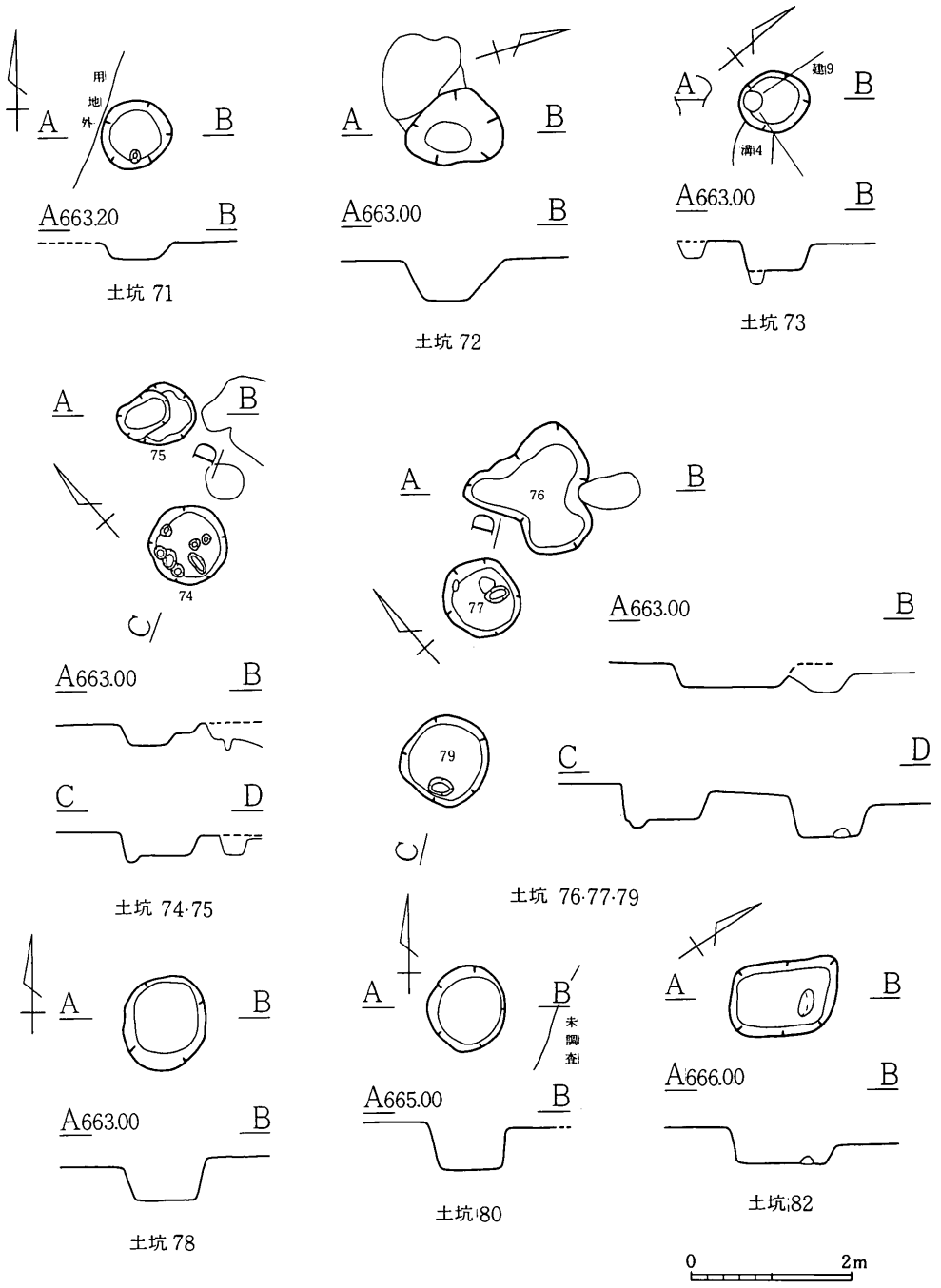
挿図19　土坑28～32・34～43・46



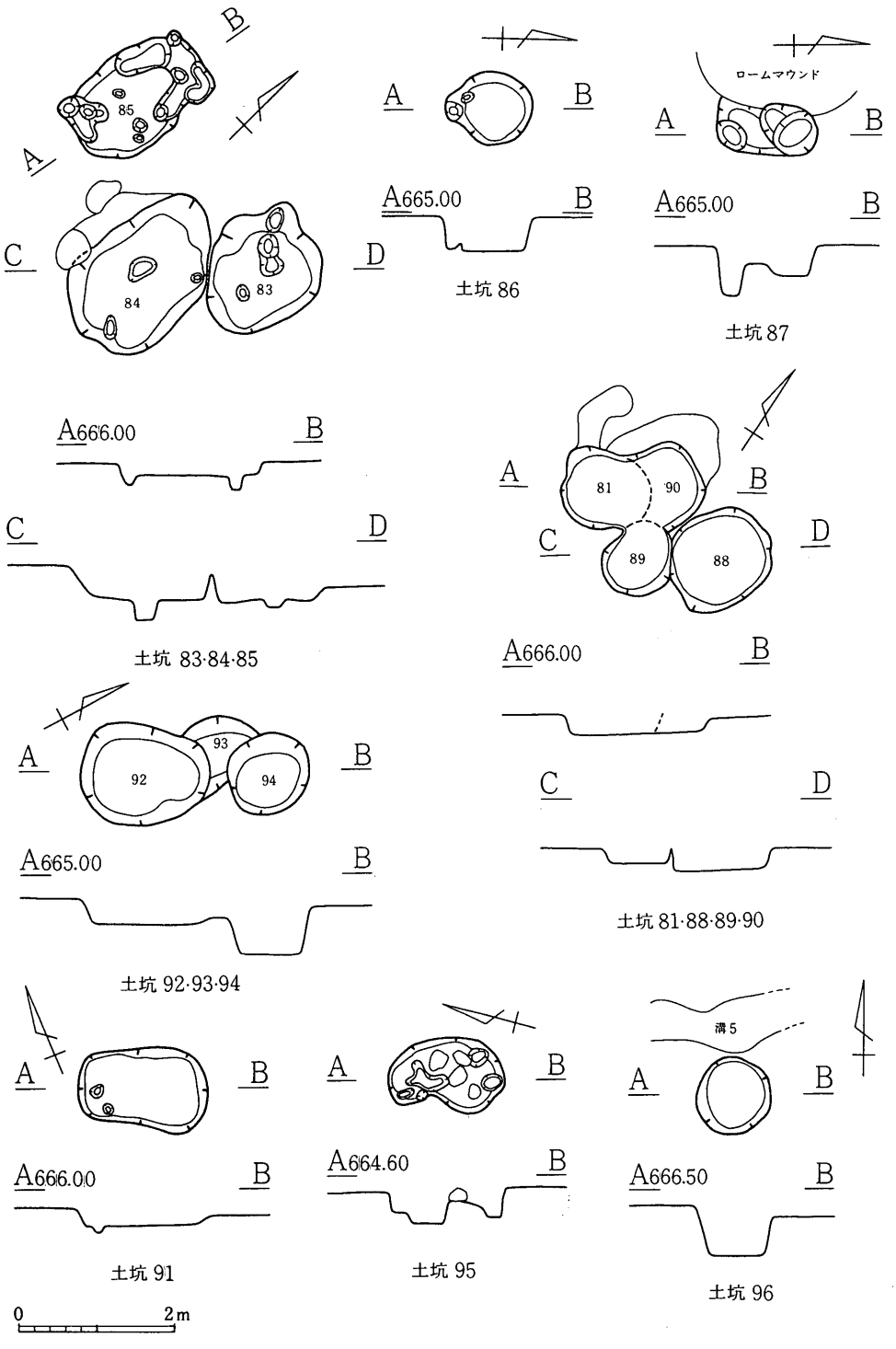
挿図20　土坑44・45・47～57・59



挿図21　土坑58・60～70

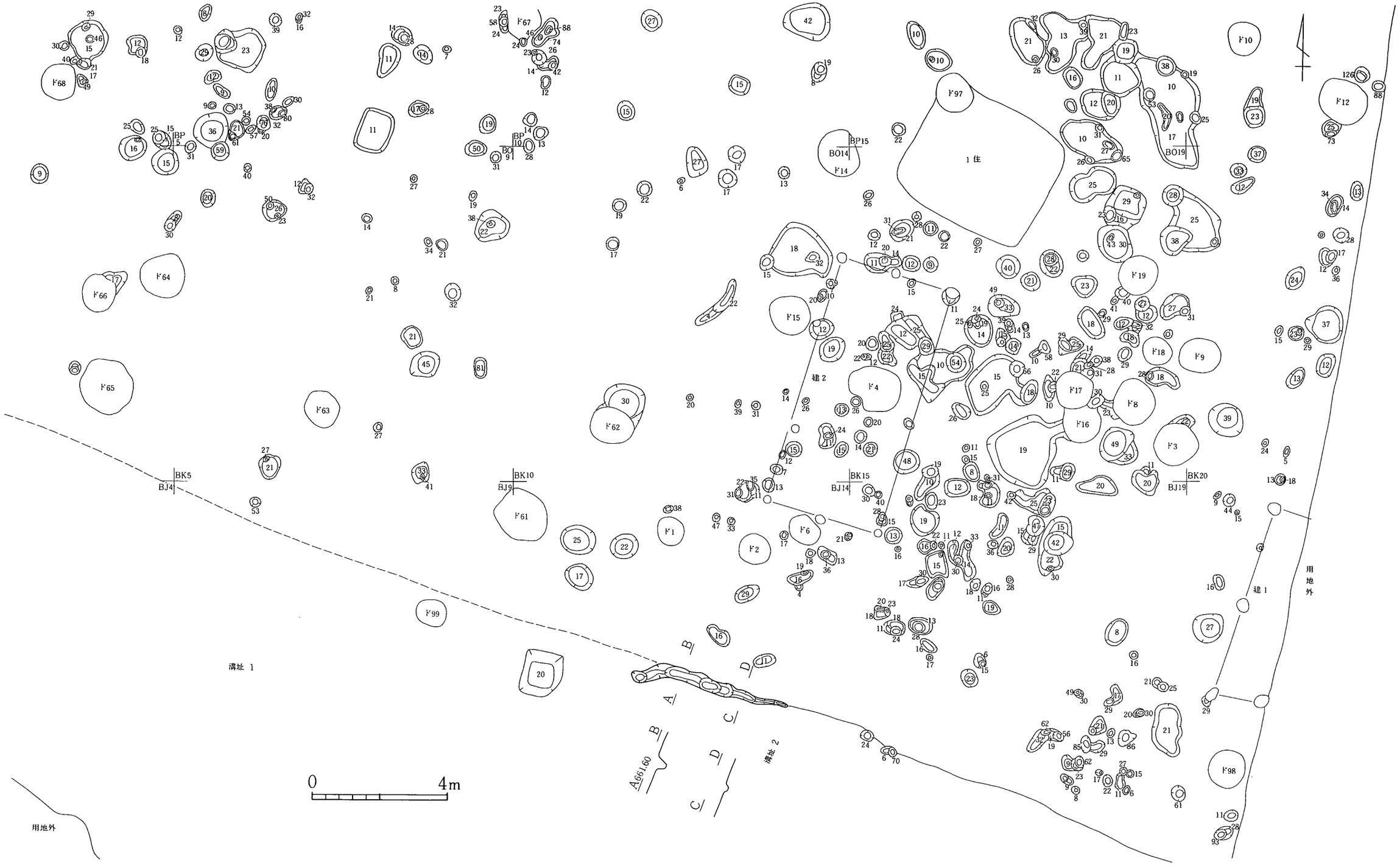


挿図22　土坑71～80・82

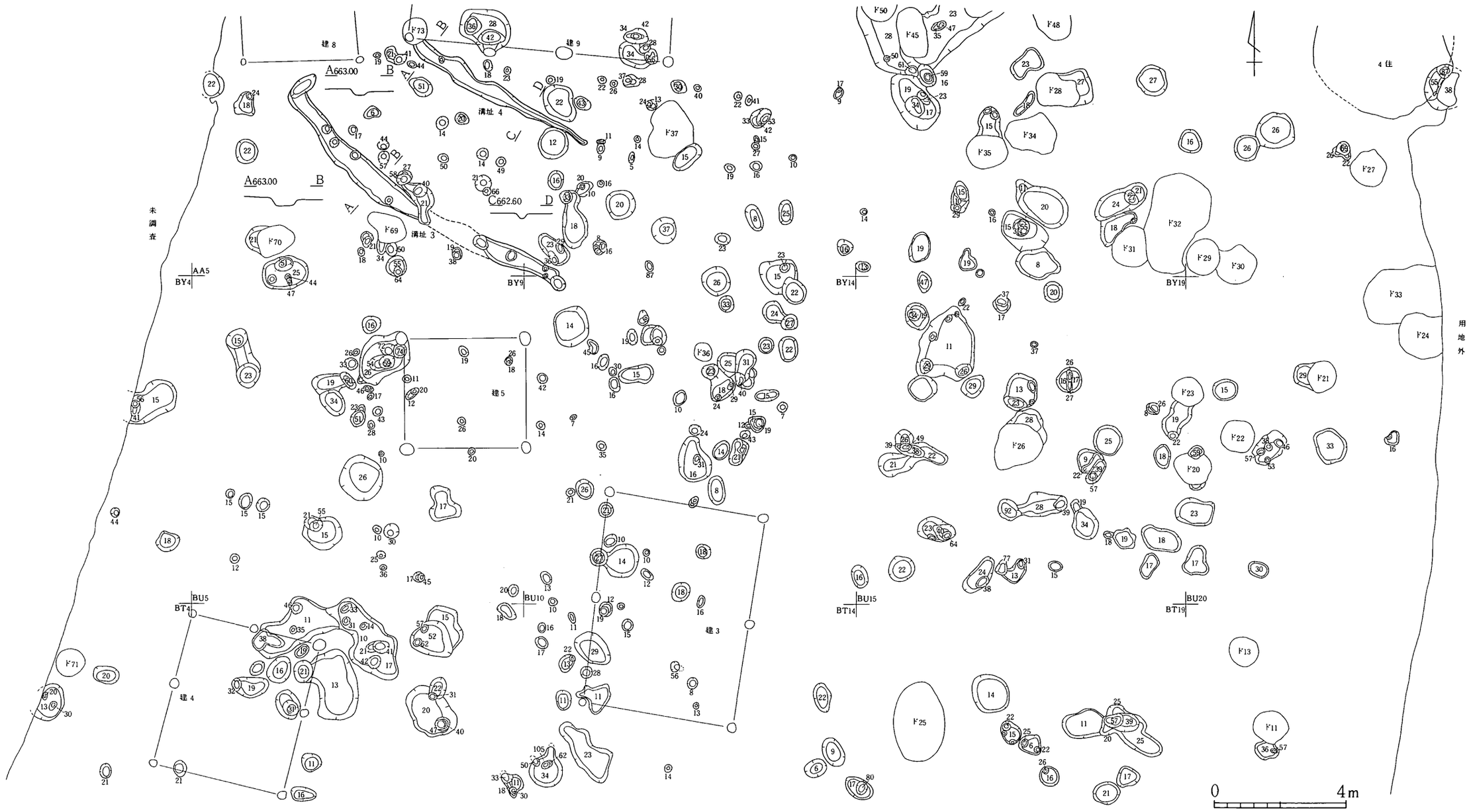


挿図23　土坑81・83～96

挿図24　溝址１、ピット（１）



挿図25　溝址１・２、ピット（２）

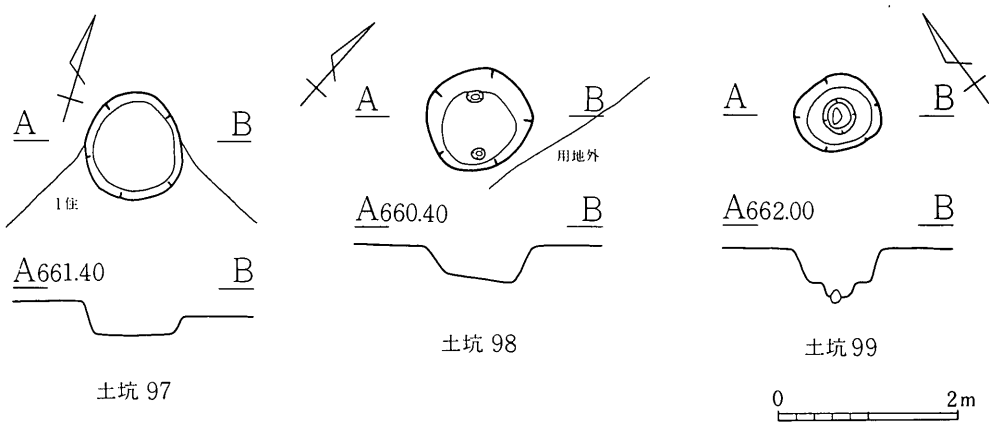


挿図26　溝址３・４、ピット（３）

挿図27　溝址５・６、ピット（４）

AP5
AO4
AP10
AO9
AP15
AO14
AK5
AJ4
AK10
AJ9
AK15
AJ14
AK20
AJ19
AF5
AE4
AF15
AE14
AF20
AE19
用地外
未調査
建8
建9
4住
0
4m

挿図28　ピット（５）



挿図29　土坑97～99

5．溝址

No.	挿図No.	検出位置	規模(長×大幅×大深)m (　小幅×小深)	主　軸	覆土	時代・時期	出土遺物	備考
1	24 25	BW－38	71×13×0.4 3×0.1	N45.7° W N94.2° W			打製石斧 2	
2	25	BH－12	5×0.4×0.5 0.08×0.08	N73.9° W			打製石斧 1 横刃型石器 1	
3	26	AB－7	(10)×0.8×0.4 0.4×0.1	N69.8° W N41.7° W			打製石斧 2 砥石 1	
4	26	AC－9	(6)×0.6×0.2 0.2×0.09	N59.5° W				
5	27	AK－36	5×0.8×0.2 0.4×0.1	N93.8° W N108.4° W			打製石斧 1	
6	27	AL－42	17×0.6×0.9 1×0.09	N162.2° W			打製石斧 1	

（吉川　豊）

6．ピット

個々の説明は省略するが、調査したものはすべて掲載してある。

Ⅳ　ま　と　め

富の平遺跡の調査結果は以上のとおりであるが、時代毎の概要を記して今次調査のまとめとしたい。

1．縄文時代

(1) 縄文時代の遺物について

今次調査に於ける縄文時代に関して特筆すべきは、中期初頭期に比定される土器群が出土したことである。

富の平遺跡に於ける該期の土器群は土坑より出土したもので、惜しむらくは小破片が多く、詳細が不明な点が多い。あえて言えば、沈線文系（集合沈線文系）が縄文系より多い。この点は飯田下伊那地方でも同様な傾向がうかがえる。であるとすれば、中期中葉に南信地方で多く見られる平出第Ⅲ類Ａ式土器と系譜上でもスムースに繋がる。

近年長野県内の該期の土器について精力的に研究が進みつつあるが（三上　1987・三上　上田　1995等）、この飯田下伊那地方に於いては資料が少なく、様相が不明であるというのが現状である。管見に上った中では、瑠璃寺前遺跡遺構外出土土器（長野県教育委員会　1972b）、豊丘村田村原遺跡遺構外出土土器（豊丘村教育委員会　1974）、飯田市鼎天伯Ａ・Ｂ遺跡遺構外出土土器（長野県教育委員会　1975）、喬木村地神遺跡８号住居址出土遺物（喬木村教育委員会　1981）、飯田市上郷増田遺跡14号住居址出土遺物（上郷町教育委員会　1989）、飯田市上郷垣外遺跡土坑24出土土器（上郷町教育委員会　1989）、飯田市上郷大明神原遺跡土坑79出土土器（上郷町教育委員会　1990）、飯田市伊賀良直刀原遺跡土坑15・18・26・30・39・41・42・43・44・45・46・68・73・74・75・遺構外出土土器（飯田市教育委員会　1991e）、清内路村大桜遺跡出土土器（下伊那史編纂委員会　1991）、飯田市伊賀良殿原遺跡103号住居址・土坑171（飯田市教育委員会　1992）、高森町広庭遺跡土壙１・30・31他土壙出土土器（高森町教育委員会　1994）、伊久間原遺跡４号住居址出土土器（喬木村教育委員会　1995）等がある（挿図30・31）。

(2) 縄文時代の集落について

前述した中期初頭期に比定される土坑群が確認されている。これらは調査区西側を除きほぼ全面に確認された。何如なる性格を持つものかは不明であるが、住居址等が確認されていないので今次調査地点は該期の居住域の西端部にあたると思われる。しかし、調査前の現況を鑑みるに、造成（切り盛り）した水田となっており、切られた箇所は遺構確認面であるローム上層の削平が甚だ著しく、竪穴住居址の住居内施設（柱穴・入口施設等）を土坑として把握した可能性のある

遺構もあることを指摘しておきたい。

いずれも中期後葉と思われる、竪穴住居址が2軒確認されている。検出位置は調査区東端（4号住居址）と西端（6号住居址）である。当該地の地理的・自然的環境は南西から北東に傾斜した、北斜面となっている。調査区北側は試掘調査の結果、湿地帯であると確認された。これらの諸条件を総合するに、該期の集落として考えられることは、調査区南側に展開し、確認された遺構の密度から考えて小規模な集落であったと考えられる。（吉川金利）

2．古墳時代前期

(1) 富の平遺跡の集落について

今次調査における該期の遺構は調査範囲内の傾斜方向の上から下（西から東）に3軒の竪穴住居址が検出された。

3軒の住居址のうち、1・5号住居址からは時代の特定可能な遺物の出土はないが、住居址形態や炉の形態などから当地方の弥生時代後期から古墳時代前期の形態と一致するものである。

一方、2号住居址からは、甕・高坏などの土師器が出土しており、古墳時代前期後半に位置づけられる。また、住居址形態は、他の2軒と基本的には共通する。

上記及び住居の配置なども考慮すると、3軒の住居は同時期と判断して支し障えないものといえる。

また、1号住居址と2号住居址の中間には未調査部分があり、他の住居址位置（間隔）からみて、この間にもう1軒の住居址が存在した可能性が高い。とすれば、今回の調査範囲内に4軒の該期住居が存在したことになる。

さらにまた、調査範囲内の北側部分には徐々に傾斜して湿地帯に至っており、遺構・遺物も確認されておらず、この住居址の並ぶ付近が、本集落の北端にあたると判断される。

なお、本集落の全体規模は不明であるが、調査範囲の南側が東西方面に延びる尾根状地形の頂部にあたることより、こちら側に展開していたと推測可能である。

当地方の弥生時代の集落は、後期になると天竜川流域といった生産域を容易に確保できる比較的低地から、段丘上・扇状地といった場所にも拡散すると考えられている。しかし、以前は標高550m前後の場所に展開されていた集落の調査例が多かったが、調査が進むに従い、標高650m以上といった高所にも集落が確認されるようになってきた。弥生時代終末〜古墳時代前期に属する調査例としては、下伊那郡高森町月夜平遺跡：標高650m：竪穴住居址10軒（高森町教育委員会 1970）・飯田市伊賀良梅ケ久保遺跡：標高690m：竪穴住居址1軒（飯田市教育委員会 1987a）・飯田市上久堅北田遺跡：標高650m：竪穴住居址5軒（飯田市教育委員会 1988c）・飯田市伊賀良細田北遺跡：標高680m：竪穴住居址2軒（飯田市教育委員会 1990）があり、標高630mの遺

跡として飯田市伊賀良大原遺跡があり、竪穴住居址3軒が確認されている（飯田市教育委員会1991c・1995）。

これらの集落分布の持つ意味は、小沢川沿いの湿地までも生産域として利用する、かなりの高所までにも集落が拡散していくと言うことであろう。無論、従来から言われている陸耕（畑作）の存在も加味しなければならない。富の平遺跡に住んだ人々は、居住域の中心を調査区内住居址検出地点以南とし、調査区北側の湿地に水田経営地を求め、居住域周辺の乾燥地を畑作地とした姿を推測させる。

では、何故此の如き高所まで集落が存在したのか。現在の時点では明確には言及できないが、ひとつには、前述したように当地方の該期の特徴のひとつとされる陸耕の存在、つまり、生産基盤の多様化、及び農業生産を基本とする生活形態の中にあって、高所まで集落を拡散する必要を生じた社会情勢を反映した結果等がその要因と考えられる。　　（小林正春・吉川金利）

（2）古墳時代の遺物について

該期住居址3軒を調査したわけであるが、うち1軒からは比較的多量の土器が出土し、2軒は皆無という状況である。このことは、住居の性格そのものの相異・住居廃絶時の姿の差等いくつかの要因が考えられるが、今次調査では集落の一画を調査し得たのみであり、具体的に論究は困難であるが、次のようなことは推測可能といえる。まず、住居そのものの性格の差であるが、遺物の出土した2号住居址については、通常日常の什器とされるものよりは、高坏という供献用の器が主体を占めることから集落内において、祭祀等特定の性格を有する建物もしくは、そうした行為に関連ある人物の住居であった。一方、他の住居址については通常の集落民の住居施設と位置づけられる。次に、各住居址の廃絶時の状況に差のあったことが考えられる。それぞれの配置状況から同時存在と考えられるわけであるが、遺物出土状況から、2号住居址が火事・病等の不測の事態の発生した家であることも考えられる。なお、2軒の住居址からは出土遺物は皆無であり、2号住居址にしても、日常什器がわずかしか認められないことからして、いずれの住居址においても、破損し易い土器類の使用期間が短かかったと考えられる。すなわち、これらの住居さらには、本集落の存続期間がかなり短期間であったといえる。

なお、出土遺物の具体的な様相として、甕は、「く」の字状の単純口縁を呈するもの（1－2）と、口縁部がやや外反し、胴部が球状に膨らむもの、の2種類がある。高坏は坏部が稜を持ってほぼ直に開くものが多い（1－3・4・5・7・8）が、なかでも脚部の形状によって以下の如く分類できる。脚部の柱状部分が基部から脚端部まで円錐状に広がり、脚端部がなだらかに外反するもの（1－3・4）、脚部の柱状部分がエンタシス状に途中で膨らむもの（1－5）、脚部が喇叭状に開くもの（1－7）、がある。また、坏部が内湾し、脚部が基部よりストレートに外反するもの（1－6）もある。よって高坏は4形式に分類可能であり、古墳時代前期後半の一時期の特徴を端的に示す資料と言える。

当地方で該期に比定される遺物としては、飯田市松尾清水遺跡（飯田市教育委員会　1976・1991g)、飯田市座光寺田中・倉垣外遺跡（飯田市教育委員会　1986)、飯田市上郷兼田遺跡（上郷町教育委員会　1988)、飯田市上郷薮越遺跡（上郷町教育委員会　1991)、飯田市上郷薮上遺跡（飯田市教育委員会　1994b）等があげられる。　（小林正春）

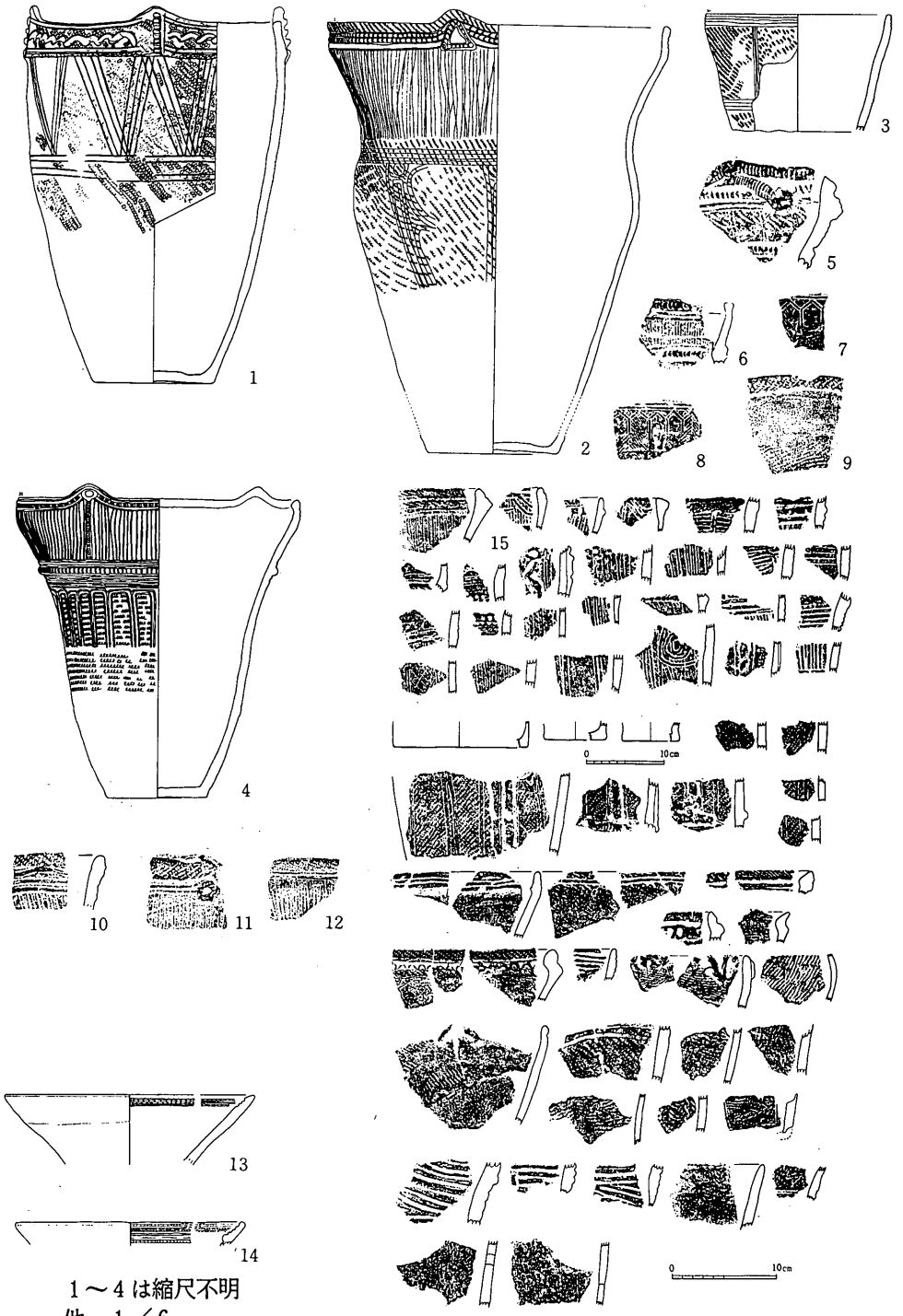
3．中世以降

（1）建物址について

中世として把握された遺構として建物址が9棟ある。調査区中央から東側にかけて確認されており、棟方向を中心としてグルーピングすると3グループ把握できる。①：建物址7を中心とする建物址1・2・3・4・6・7と②：建物址5・8と③：建物址6のグループである。①は方向がN6°～19°Eを示し、建物址7は総柱で住居施設、他の側柱の建物は収蔵施設と想定される。②はN1°～5°Wで、すべて側柱となっており、収蔵施設の可能性を示す。③はN31°E（N59°W）で、収蔵施設と考えられる。これらのグループ間の関係は不明であるが、いずれにしても今次調査地点は①グループを中心とした居住域であったと思われる。なお、時期的には柱穴が小規模な方形を呈することや、その覆土が当地方の中世期の遺構に見られる黒色土を呈していたことから、中世以降と考えたが、出土遺物もなく詳細な時代の特定は困難である。

（吉川金利）

挿図30　飯田下伊那地方に於ける縄文中期初頭土器群（1）



1～4は縮尺不明
他　1／6

挿図31　飯田下伊那地方に於ける縄文中期初頭土器群（2）

挿図30・31に用いた土器群の出土遺跡・遺構表

挿図No.	No.	遺　跡　名	遺構名	備　考	挿図No.	No.	遺　跡　名	遺構名	備　考
30	1	清内路村・大桜		出土不明	31	3	高森町・広庭	土壙31	
30	2	飯田市伊賀良・殿原	103住		31	4	〃	土壙30	
30	3	〃　上郷・大明神原	土坑79		31	5	〃	土壙	
30	4	番木村地神	8住		31	6	〃	遺構外	
30	5	飯田市上郷・垣外	土坑24		31	7	飯田市鼎・天伯B	遺構外	
30	6	〃　伊賀良・直刀原	土坑39		31	8	〃	〃	
30	7	〃	〃		31	9	飯田市伊賀良・直刀原	土坑39	
30	8	〃	〃		31	10	〃	遺構外	
30	9	〃	土坑73		31	11	〃	土坑68	
30	10	〃	土坑41		31	12	〃	〃	
30	11	高森町・瑠璃寺前	遺構外		31	13	〃	土坑73	
30	12	〃	〃		31	14	飯田市上郷・増田	14住	
30	13	〃	〃			～			
30	14	〃	〃		31	72			
30	15	〃	〃						
30	16	〃	〃						
30	17	〃	〃						
30	18	〃	〃						
30	19	〃	〃						
30	20	〃	〃						
30	21	〃	〃						
30	22	豊丘村・田村原	遺構外						
30	23	〃	〃						
30	24	〃	〃						
30	25	高森町・瑠璃寺前	遺構外						
30	26	〃	〃						
30	27	高森町・広庭	遺構外						
30	28	飯田市伊賀良・直刀原	土坑30						
30	29	飯田市伊賀良・殿原	土坑171						
30	30	飯田市伊賀良・直刀原	土坑26						
31	1	〃	土坑18						
31	2	高森町・広庭	土壙1						

≪引用・参考文献≫

飯田市教育委員会　1976　『清水遺跡』
飯田市教育委員会　1977　『伊賀良中島平』
飯田市教育委員会　1978　『伊賀良宮ノ先』
飯田市教育委員会　1980　『猿小場遺跡』
飯田市教育委員会　1983a　『酒屋前遺跡』
飯田市教育委員会　1983b　『鳥屋平』
飯田市教育委員会　1986　『恒川遺跡群』
飯田市教育委員会　1987a　『飯田垣外・火振原・梅ケ久保遺跡』
飯田市教育委員会　1987b　『殿原遺跡』
飯田市教育委員会　1988a　『田井座遺跡』
飯田市教育委員会　1988b　『小垣外・八幡面遺跡』
飯田市教育委員会　1988c　『北田遺跡』
飯田市教育委員会　1989a　『下原遺跡』
飯田市教育委員会　1989b　『高野遺跡』
飯田市教育委員会　1990　『細田北遺跡』
飯田市教育委員会　1991a　『田井座遺跡・一色遺跡・名古熊下遺跡』
飯田市教育委員会　1991b　『田井座遺跡』
飯田市教育委員会　1991c　『大原遺跡』
飯田市教育委員会　1991d　『公文所前遺跡』
飯田市教育委員会　1991e　『直刀原遺跡』
飯田市教育委員会　1991f　『樋明古墳』
飯田市教育委員会　1991g　『清水遺跡』
飯田市教育委員会　1992　『殿原遺跡』
飯田市教育委員会　1994a　『中村中平遺跡』
飯田市教育委員会　1994b　『堂垣外・橋爪・薮上・長橋遺跡』
飯田市教育委員会　1995　『北方大原遺跡』
岡谷市教育委員会　1986　『梨久保遺跡』
上郷町教育委員会　1988　『兼田遺跡』
上郷町教育委員会　1989　『ツルサシ遺跡・ミカド遺跡・増田遺跡・垣外遺跡』
上郷町教育委員会　1990　『大明神原遺跡Ⅲ』
上郷町教育委員会　1991　『薮越遺跡』
下伊那史編纂委員会　1955　『下伊那史　第2巻』

下伊那史編纂委員会　1955　『下伊那史　第３巻』
下伊那史編纂委員会　1967　『下伊那史　第５巻』
下伊那史編纂委員会　1991　『下伊那史　第１巻』
下伊那教育会編　1985　『親と子の下伊那史』
喬木村教育委員会　1981　『地神遺跡』
喬木村教育委員会　1995　『伊久間原遺跡公園広場』
高森町教育委員会　1970　『月夜平－第１次・第２次埋蔵文化財発掘報告書』
高森町教育委員会　1994　『深山田・広庭・ヨシガタ・大宿遺跡』
筒井泰蔵　1973　『伊賀良村史』
豊丘村教育委員会　1974　『田村原遺跡』
長野県教育委員会　1972a　『中央道調査報告　－飯田地区その２－』
長野県教育委員会　1972b　『中央道調査報告　－下伊那郡高森町地内その１－』
長野県教育委員会　1973　『中央道調査報告　－飯田地区－　昭和45年度』
長野県教育委員会　1975　『中央道調査報告　－下伊那郡鼎町その２・天伯Ａ－』
長野県史刊行会　1983　『長野県史　考古資料編　主要遺跡（中・南信）』
長野県史刊行会　1986　『長野県史　通史編　第２巻　中世１』
長野県史刊行会　1987　『長野県史　通史編　第３巻　中世２』
長野県史刊行会　1988　『長野県史　考古資料編　遺構・遺物』
長野県史刊行会　1989　『長野県史　通史編　第１巻　原始・古代』
伴　信夫・宮沢恒之　1967　「長野県飯田市伊賀良西ノ原遺跡調査報告」『信濃』19巻12号
松島　透　1957　「長野県立野遺跡の捺型文土器」『石器時代』４
三上徹也　1987　「梨久保式土器　再考」『長野県埋蔵文化財センター紀要』１
三上徹也・上田典男　1995　「長野県の様相」『中期初頭の諸様相』縄文セミナーの会

飯田市富の平遺跡自然科学分析報告

パリノ・サーヴェイ株式会社

富の平遺跡花粉分析報告

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

富の平遺跡が位置する伊那盆地南半分（下伊那地域）の地形・地質の概略は、松島（1988)によると、次の通りである。下伊那地域はその中に天竜川が流れ、天竜川より東側を竜東地域、天竜川より西側を竜西地域と呼ばれる。竜東地域は、段丘地形が発達し、その段丘より山地側は伊那層群が分布する丘陵地帯となる。竜西地域は、木曽山脈の山麓部に形成された新旧の数多い扇状地群が占め、それらの扇状地を開析した段丘が複雑に分布する。本遺跡は、竜西地域に発達した扇状地の扇端部付近に位置する。

本遺跡では、これまでの発掘調査により縄文時代中期から古墳時代初頭にわたる遺構・遺物が検出されている。

今回の自然科学分析調査は、縄文時代の本遺跡周辺地域の古植生を明らかにするために、花粉分析を行うこととした。

1．試料

試料は、本遺跡の土層断面から採取された合計３点（試料名：サンプル№ 1～3)である。

サンプル№1は縄文時代中期初頭から古墳時代初頭の遺構確認面の上層から採取された。サンプル№2は縄文時代中期の遺物包含層の上層から採取された。サンプル№3は縄文時代中期の遺物包含層から採取された。したがって、試料の時代性が明確なものはサンプル№3であり、サンプル№1.2は時代時期とともに現時点では不明である。試料は黒褐色～黒色シルトからなる。

2．花粉分析の方法

花粉・胞子化石は、湿重約10ｇの試料についてKOH処理、重液分離(ZnBr2：比重2.2)、HF処理、アセトリシス処理の順に物理・化学的な処理を施して、試料から分離・濃集する。処理後の残渣をグリセリンで封入し、プレパラートを作製した後、光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査しながら、出現するすべての種類(Taxa)について同定・計数結果の一覧表として表示する。

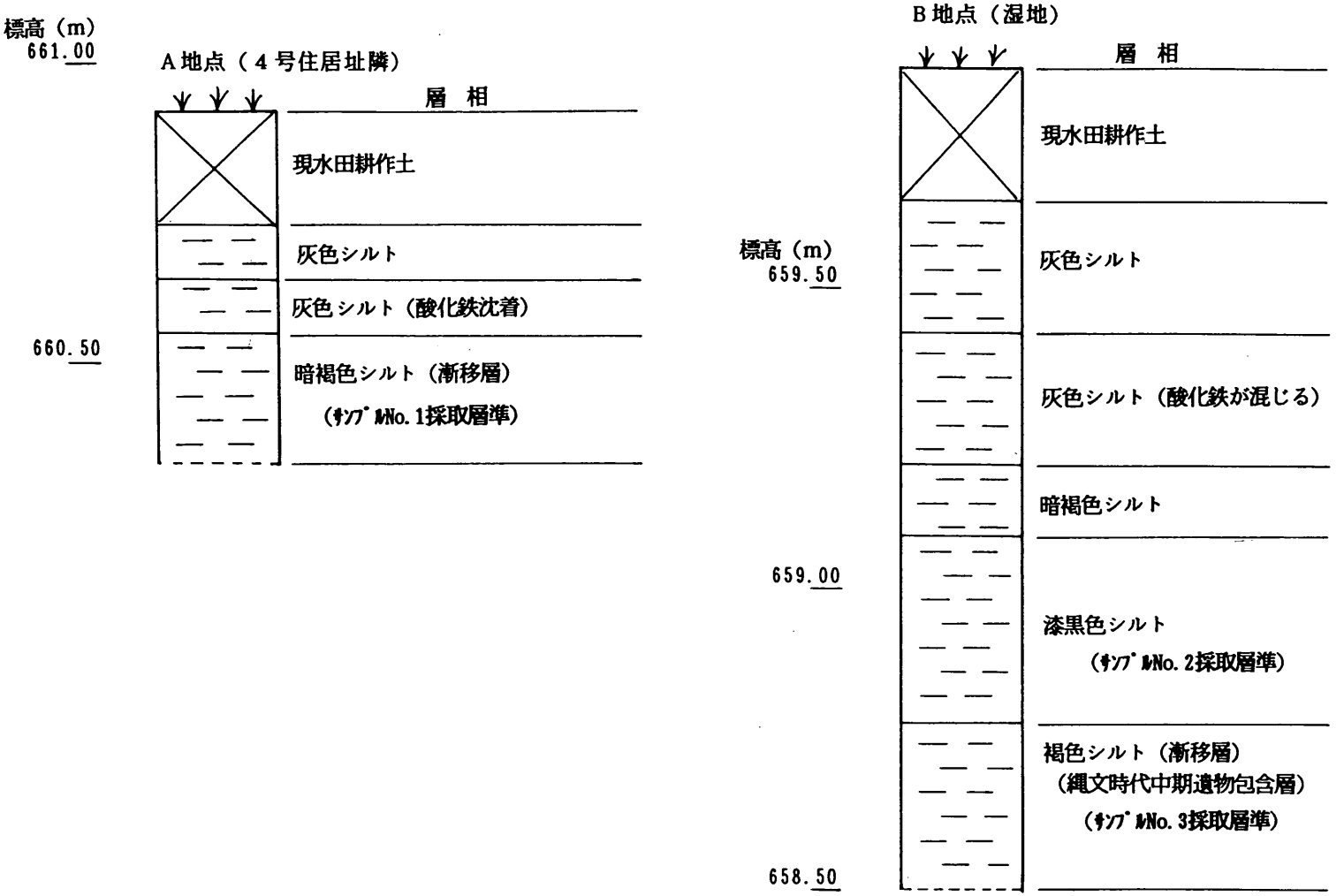


図１　基本土層模式柱状図および試料採集位置

3．花粉化石の産状

花粉化石は全体的に保存状態が悪く、外膜が溶けて薄くなっていたり、あるいは壊れていたりするまた、サンプル№1でソバ属・マツムシソウ属、サンプル№2でヨモギ属などがわずかに検出される。

一般的に落葉広葉樹に由来する花粉に比較して、針葉樹に由来する花粉やシダ類胞子の方が分解しにくいことが知られている。(中村，1967)。また徳永・山内（1971）も同様なことを述べ、落葉広葉樹に由来する花粉の半数以上が風化の痕跡をみせていたら、その試料は花粉分析に不適であるとしている。今回、検出された花粉化石は、当時、本遺跡周辺に生育していた母植物に由来している可能性がある。しかしながら、上記したように花粉化石の保存状態が悪く、統計的に植生復元ができないことや試料が採取された層位成因・堆積環境が不明であるため、今回の花粉分析結果より、本遺跡周辺の古植生について検討することは不可能である。

表2　花粉分析結果

種類（Taxa）　サンプル№	1	2	3
木本花粉			
ツガ属	1	－	－
草本花粉			
イネ科	1	1	－
ソバ属	4	－	－
オミナエシ属	1	－	－
マツムシソウ属	16	－	－
ヨモギ属	－	2	－
他のキク亜科	2	－	7
不明花粉	－	－	－
シダ類胞子			
シダ類胞子	36	3	7
合計			
木本花粉	1	0	0
草本花粉	24	10	0
不明花粉	0	0	0
シダ類胞子	36	3	7
総花粉・胞子数	61	13	7

≪引用文献≫

松島信幸（1988）伊那盆地．日本の地質4　中部地方Ⅰ，第4章第四系，内陸地域，日本の地質「中部地方Ⅰ」編集委員会編，p.159-161，共立出版株式会社．

中村　純（1967）花粉分析．古今書院，232P．

徳永重元・山内輝子（1977）花粉・胞子．化石の研究法，化石研究会編著，P.50-73，共立出版株式会社．

報告書抄録

ふりがな	とみのたいらいせき
書名	富の平遺跡
副書名	土地改良総合整備事業に伴う埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	吉川　豊・馬場保之・吉川金利
編集機関	長野県飯田市教育委員会
所在地	〒395　長野県飯田市上郷飯沼3145番地　☎0265－53－4545
発行年月日	1996年3月

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
とみのたいら 富の平	いいだしおおせぎ 飯田市大瀬木	2053		35° 29′ 35″	137° 46′ 40″	平成4年 12月10日 平成5年 6月8日	4315㎡	土地改良 総合整備 事業 圃場整備

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
富の平	集落址	縄文中期 古墳前期 中世	竪穴住居址　2軒 土坑　97基 竪穴住居址　3軒 掘立柱建物址 9棟 溝址　6条	縄文土器 縄文石器 土師器甕 2 高坏 7	当地方では比較的出土例が少ない縄文中期初頭の土器が出土

富の平遺跡

土地改良総合整備事業に伴う
埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書

－本　文　編－

1996年3月　発行

編集・発行　長野県飯田市上郷飯沼3145
長野県飯田市教育委員会

印　　刷　龍共印刷株式会社